エンジェル・ペイント

沙夜菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
エンジェル・ペイント

【Ｎコード】
Ｎ０９９８Ｐ

【作者名】
沙夜菜

【あらすじ】
１章１章、特に山があるわけでもありませんが、主人公たちの日常をゆっくり書いていきたいと思っています。
どうか最後まで、お付き合いください＾＾

プロローグ

５月下旬、初夏。

――――あるいは、初夏と呼ばれる時季。

カッターシャツが汗でじっとりと濡れて、額からは汗が流れおちる。

ここから見える公園の噴水には、早くも小さい子たちが水着を来て遊んでいる。市民プールも大盛況。

ひっきりなしにセミの鳴き声が聞こえ、部屋で窓や扉を開けないのは自殺行為に値する。

――――ような状況を、「初夏」と呼べるのだろうか。

今年は、例年になく暑いと聞いた。

６月に入る前からこんな気温で、一体７月からどうなるのか本当に疑問である。

夏は、大嫌いだった。

当然、夏の始まりの「初夏」が好きなわけがない。

でも、今夏が嫌いかと聞かれるとハッキリ「Ｎｏ」とは言えない。

しかし、「Ｙｅｓ」とも言えない。

脳裏に響く、あの悲鳴。

あの辛い出来事があった「初夏」は一体いつだったか。

それと同時に、「初夏」が楽しみになったのはいつのことだったか。

あの笑顔が見れなくなったのは、いつのことだったか。

第1章（前書き）

最近、サブタイトル考えるのが面倒でずっと「1章、2章」で通しっぱなしです（´・ω・、）

第1章

「今日、ななめ向かいに引っ越してきました、水野です」
ある11月の土曜日、親の留守中に水野と名乗る女の人が来た。――綺麗な人だ。
「どうも」
とりあえず会釈して、女の人の頭越しに「ななめ向かい」を見てみた。
多分、この地域では一番広い。玄関の横には細い木が立っているしゃれた家。
ここにこの人1人で住むのか――――
俺の心の内を見透かしたように、水野さんは言った。
「中2の娘もいるんですけど、具合が悪いというもので。主人も早々仕事なんです。ごめんなさい」
「いや、全然・・・・・・」
ものすごく申し訳なさそうな顔をされて、あわてて俺は首を振る。
「中2・・・・・・って俺、いや、僕と同い年ですね。よろしくお願いします」
そう言うと――――あわてて、「俺」と言いかけたのを「僕」と言いなおし――――、水野さんも笑って頭を下げた。・・・・・・かなり、深く頭を下げる人だ。
「こちらこそ、娘の学校のことなどでお世話になることもあるかと思いますがお願いします。あとこれ」
そう言って差し出されたのは、洗剤らしき包み。
「つまらないものですが。では、お家の方にもよろしくお願いします」
また水野さんは頭を下げて、家へと戻って行く。
「あの」
ふいに、俺は声をかけた。驚いたように水野さんが振り返る。

「学校は、いつから」
水野さんがフッと笑って言った。
「月曜からです。よろしくお願いします」
ここでもまたお辞儀。そんなにペコペコしなくても、と思うが、別に嫌いには・・・・・・むしろ、好意を持った方だと思う。

「あんた、迎えにいってあげなさいよ」
母さんが帰ってきて、水野さんのことを話すと母さんが言った。思わず、飲みかけの炭酸を吹きかけて、むせかえりながら俺は声を上げた。
「な、なんで俺が」
誰を迎えに行くかといえば、もちろん「水野さん家の娘さん」である。
「なんでって、その方がなんでよ？」
きょとんとした顔は本意なのか、わざとなのか分からないが母さんが聞いてくる。
「なんでって・・・・・・そりゃだって、なんでよ」
またも同じ言葉で聞き返す俺に、母さんは苦笑交じりに言った。
「だって、このあたりで中学生ってあんただけだし。しかも同学年ときたら、あんたが行かないと他に誰が行くの」
――――――誰も行かない
その言葉を呑みこんで、俺は不本意な顔・・・・・・をした、つもり。
そんな俺を完全に無視して、母さんはぽそっと呟いた。
「途中、こける定番のところとか、凶暴な犬とかいるみたいだし」
・・・・・・完全に、俺の負けである。
しかたなく、俺はうなずいた。
まぁいい。母さんの言いつけを無視する、という手もあるのだ。
こんなことを言っておきながらなんだが、その少女が気になった

と言っても過言ではない。
一体、どんな少女なのか――――
・・・・・念のために言うが、迎えに行く気になったというわけではない。

第2章

ピンポーン

月曜の朝、俺はしぶしぶ水野家のインターホンを押した。

すっぽかすという手も、もちろんあった。しかし、俺がインターホンを押すまで窓からの母さんの痛すぎる視線があったのだから、押さないわけにはいかない。そして、押したからには一緒に行かないわけにはいかない。

「はい」

玄関から、水野さんが顔を出した。

「あ、いや、その、娘さんを迎えに――――親が、行けって言うものですから。・・・・・・もし迷惑じゃなければだけど」

「迎えに来た」と伝えて、あわてて「親が」と付け加える。自主的に来たわけではない、ということを伝えるためだ。

「あ、ちょっと待ってて、呼んでくるから」

水野さんが一度奥に引っ込む。――――と、中から水野さん・・・・・・お母さんそっくりの綺麗な顔立ちの女の子が出てきた。

「水野、美湖(みこ)です」

か細い声でそう言って、小さく頭を下げる。

――――極度の人見知り。

「あ、足立光陽(あだちこうよう)です」

俺も頭を下げて、唾を飲み込んだ。

「い、行こっか」

そう言って水野さん・・・・・・お母さんの方を見ると、微笑んで言う。

「ありがとう、よろしくお願いします」

もう一度、俺は軽く頭を下げて美湖・・・・・・という名の少女にうなずいた。

その人も小さくうなずいて、お母さんに「行ってきます」と言う。

それを確認して、俺は学校の方へと歩き出した。
ずっと、美湖、さんはうつむいている。
「人見知り？」
と聞いてみると、顔を赤くしてうなずいた。
道中、工藤さん家の「凶暴な犬」に吠えたてられて美湖さんは小さく声をあげた。
「そいつ、１週間ぐらいは吠えるけど、噛みはしないから」
と言うと、「１週間っ？」とまたしても声を上げる。
しばらく歩いて、俺はあることを思い出して美湖さんを振りむいた。
「そこ、こけないように気をつけ・・・・・・」
言い終わる前に手が出た。今まさにこけかけていた美湖さんの腕を掴む。
「気をつけて」
改めて言った俺に、美湖さんは小さくうなずく。
「あり・・・・・がとう」
「そこ、なぜかは分かんないけど、今までに何回もこけた人いるんだ」
美湖さんが、俺の言葉に初めて笑った。
俺もつられて笑う。
「あ、そうだ、えっと。・・・・・足立君て、何組？」
相変わらずの小さい声で美湖さんが聞いてきた。
「俺は３組。あと、光陽って呼んでくれていい・・・・・・っていうか、呼んでくれた方がいい。呼びにくかったら光でもいいけど」
俺の言葉に、美湖さんが「よかった」と笑う。
「私も、３組って言われて。でも、光・・・・・がいるなら、ちょっと安心かも。なら、私のことも美湖って呼んで」
はじめて、美湖がこちらと目を合わせた。やっと目を合わせてくれて、だんだん口数が増えている気がして、俺はなぜか嬉しくなった。　人の笑っている顔を見て嬉しくなるなんて、１４年生きてき

て初めてのことである。
「光――――！」
後ろから大声で呼ばれて、美湖がそっと窺うように後ろを見る。俺は振り向かなくても誰だかは分かったので、無視して歩き続けた。
「無視するなよ」
俺の背中に軽くげんこつを入れて、そいつが言う。
「ほら、やっぱ瞬（しゅん）だろ。振り向かなくたって分かるのに、いちいち振り向けって言われても。しかも、毎朝毎朝そんな大声で呼ぶなって、何回言えば分かる」
俺が言い終わる前に、瞬は美湖を見、俺を見、囁いた。
「彼女？」
その言葉に、思わずこけそうになって瞬を睨む。
「俺的に、結構長い付き合いだと思うんだけどさ、それでもまだ俺にそんなものが出来るって、お前本気で思うのか？」
「思わない」
――――自分から撥（は）ねておいて、即答されたらそれはそれで何かムカつく。・・・・・・なんとも身勝手な。
ふいに、美湖のクスっと笑う声がして瞬と俺は同時に振り向いた。それに気付いて、美湖が「仲いいんだね」と言ってくる。
「うん、まぁ――――幼なじみだから」
と、瞬が返した。
「小１って、幼なじみなのか？」
「分かんね」
「知らないのに言ったのかよ」
さっきからずっと、俺たちのやり取りをどこか面白そうに美湖が聞いている。
「あ・・・・・名前、言ってなかったか。俺は瞬。苗字は、永井（ながい）ね。瞬って呼んでもらっていいから」
「あ、そっか。私は水野　美湖。私のことも、美湖って呼んで」
その言葉に、瞬かちらっとこっちを見て、苦笑して首を横に振る。

なんだか、意味ありげで気に入らない。
「ほら、早く行くぞ」
と、俺はそっけなく行って再び歩き出した。瞬が駆けてきてから、ずっと止まっていたのだ。
おかげで、今日は学校に着いたのが少し遅い。
学校付近に来ると、同じ制服の奴らが一度は振り替える。
見たことがない人、つまり美湖がいるのと、美湖の顔立ちが綺麗すぎるからだろう。
美湖を職員室の前に連れて行って、「先に教室行ってるから」と瞬と2人で歩き始める。
「うん、ありがとう」
と、背後から声がかかった。今日で2回目の「ありがとう」だ。でも、今回はつっかえていない。
何か返す代わりに小さくうなずいて、俺は瞬と階段を駆け上がった。

第3章

「ねぇ、朝一緒だった人、誰」
席に着くと、いきなり右隣の女子、岡本が聞いてきた。
「え？あぁ、美湖」
何気なく答えて、あとから「水野」と言うべきだったと後悔するが、もう後の祭りである。
「美湖・・・・・・ちょ、もう名前で呼ぶ仲なの！？」
「家が近所なだけ――――！」
「・・・・・・ていうか、転校生っ。やっと、３組にも！」
そう、結構この中学に転校してくる奴は多いのだが、何故か３組には１人も入ってこなかった。それとは対照的に、瞬の１組にはよく入ってくるらしい。
「でもさぁ、安藤さん行ったばっかなのに？」
と、突然口を挟んできたのは岡本の友達、加藤だ。
でも、そういえばそうだ。先月、俺の左隣だった安藤がはるばる鹿児島まで飛んで行ったばかりである。岡本も思い出したようにうなずいていた。
「・・・・・・でもまぁ、本人が３組って言ってたんだから、３組なんだろ」
と俺がまとめると、２人はうなずいて他の話題に移り変わったようだった。
俺は教科書を机の中に突っ込んで、あることに気付いた。――――安藤が左隣で、今そこは空いているから、美湖は俺の左隣に来ることになる。・・・・・・ひたすら、「近所」だ。
チャイムが鳴った。
みんな席について、読書を始める。俺も周りを見習って本を広げる。・・・・・・でも、あくまでも広げただけで真面目に読んでいたわけではない。いつものことだ。

いつもと同じ時間に先生は教室に入ってくる。ふと廊下の方を見てみると、ドアの窓からぼんやりとした人影が見えた。その人影に気付いた人は、隣近所とひそひそ話し、気付かなかった人はそのまま読書を続けている。

先生が時計を見上げて言った。

「今日はここで読書をやめて。今日から新しくクラスに入ってくる人がいます」

気付いていた人は好奇心丸出しの顔、今言われて気付いた人は、「なんだいきなり」という顔をしている。

先生が、一度廊下に出て、1人の少女を連れてきた。そう、美湖だ。顔が真っ赤で、まともに顔を上げていない。「極度の人見知り」に、クラス全員の前に立つなど酷な話だろう。

先生にうながされて、美湖が口を開く。――――朝、はじめて聞いた声よりさらにか細い。

「水野、美湖です。・・・・・・よろしくお願いします」

と言って、小さく頭を下げる。 誰からともなく拍手が鳴った。

先生が、美湖をやる席を探す――――と、目があった・・・・・・気がした。

「じゃあ、水野は足立の隣な」

ここの窓際の席を指差して先生が言う。美湖がこくりとうなずいて、元安藤の席――――俺の左隣に、居心地が悪そうに座った。

チャイムが鳴って、「1時間目は数学か」とか先生がつぶやきながら出ていく。

数学では、「三角定規を持ってこい」というのを美湖は聞いていなかったらしく、あたふたしていたので差し出すと、ホッとしたように美湖は笑ってそっと受け取った。

・・・・・・なして、そこまで手つきが丁寧なんだ。そう思いつつ、「ちゃんと言えって話だよな」と言うと、我が意を得たりとばかりにうなずく。

２時間目の国語では、きっと前の学校でも優秀だったんだ、俺よりも頭がいいくらいで少しだけひるんでみたりする。
今日１日見てみると、きっと苦手なのは数学だけ、あとは全部俺を上回っていて、少しでも心配した自分が恐縮に思えるほどだった。

第4章

授業が終わり、念のため美湖に帰りは大丈夫かどうか聞いてみる。少し不安げだったがしっかりうなずいた美湖に「じゃあ」とだけ言って、俺は1組にいる瞬のところへ行った。

「行くんだよな？」

と声をかけると、瞬はうなずいて「ちゃんと持ってきたし」と言う。

今日は、2人で川の絵を描こうということになっていた。今は部活が休みの週で、学校で絵を描く機会というのがなく、家で地味に描いていたわけだが、2人とも風景画が恋しくなって瞬が誘ってきたのだ。

川というのは近くも近く、登下校に通るところだ。俺らが予定しているのはちょうど今朝、美湖がこけかけたあたりのところ。

「そういや、美湖ちゃん、来てないの？」

瞬が聞いてきた。

「だって、大丈夫って言ってたし」

と答えると、「連れてこれば良かったものを」とつぶやく。

「何、惚れたりしたわけ」

面白がって聞いてみると、「別に」と返ってきた。表情は動かなかったし、頬を赤らめたわけでもないので本当だろう。

しばらく、黙って描いていた。

ふいに瞬が俺のを覗きこんで、「なんか川、小さくないか」と聞いてくる。

「だってこれ、空メインだし。この時間帯の色好きだし、しかも今日は飛行機雲も綺麗だし。お前、それ描かないのもったいないぞ」

そう言うと、「橋メインだから」と返事が来る。

「あの手すりのところの影が綺麗だし、川にもいい感じで映ってる

し。この時間帯だからこその角度なんだから」
言われてみれば、確かに。それはそれでもったいない気がする。
「まぁ、お互い『個性豊か』ってことで・・・・・・」
「お前、先生みたいな事言おうとしただろ」
瞬の言葉にすかさず突っ込むと、「ばれたか」と笑う。
その時、後ろで人の気配がした。そっと振り返ってみると、美湖だ。今の今まで気付かなかった。
「うわ、声かけたらよかったのに」
と俺が言うと、「邪魔したくなかったから」と困ったように笑う。
「ここ、座れば」
と、瞬が自分と俺との間を空けた。
「光、ごめんね」
的なことを言いつつ美湖は、瞬が空けたところに座りこむ。
しばらくの間、俺らは描き、美湖はその絵と風景とを見比べながら、時間が過ぎた。
絵も終盤にさしかかった頃、美湖が口を開く。
「2人とも、絵上手いんだね」
ここで恒例の、「相手激励会」が始まった。
「絶対、光の方が上手いから」
「いや、明らか瞬だし」
「そんなことない。絶対、光だから」
美湖を挟んで言い合っていると、珍しく大きめの声で美湖が言う。
「2人とも、上手いから」
「でも、どちらかと言えば正直瞬だろ？」
「どちらかと言えばもクソも、普通に光だよな？」
強制的にうなずかせるような勢いで同時に尋ねると、首を横に振る。
「どっちも、同じくらいに上手いって」
これ以上続けさせるものかというように言うので、さすがに俺らは口を閉じた。

それを確認して、美湖が続ける。
「瞬君はね、なんかハッキリしてて分かりやすいって言うか、絵見てすぐに景色が分かるって言うか。光は、細かいから実際綺麗なものがもっと綺麗なってる気がする。・・・・・・2人の色つきの絵は見たことないけど、白黒だけでもそう思えるもん」
どう返せばいいのか分からなくて、瞬と顔を見合わせているとさらに美湖がつぶやいた。
「2つとも、反対だけどどっちも好きかも」
ここで、瞬と2人で照れ笑いを浮かべることになる。やがて、瞬が口を開いた。
「やっぱ光って、細かいよ。こいつ、だからかは知らないけどほとんど色鉛筆・・・・・・だろ？」
俺はうなずく。
「そう。絵の具って、難しいじゃん。乾くの待たないといけないし、それが難しくてさっさと塗ったら色が混ざるし。・・・・・・瞬は、絵の具使うの上手いよな」
俺らの話を聞きつつも、美湖はまた「激励」が始まらないか神経を尖らせているようだった。
「色鉛筆の方が出来ないって。よくあれだけで綺麗に仕上がるよ。俺が色鉛筆持ったら、ホントに幼稚園児みたいなことになるから」と、瞬は顔をしかめた。
「今度、2人の絵見せてよ」
美湖が言う。
「じゃあ明日、美術室寄って行く？」
瞬が言うが、俺が言い返した。
「部活停止週なんだから、ダメだろ」
ここで美湖が首を傾げたので、「部活停止週」について説明する。
「2ヶ月に1回、金曜にテストがあって・・・・・・」
「テストなんかいらないよな」
瞬が苦い顔をして口をはさんできた。

「それの勉強のために1週間部活がなくなるんだ。・・・・・・真面目に勉強する奴なんか、いないけど」
「なんでそんなテストがあるのか、本当不思議」
瞬の言葉に美湖もうなずき、若干嫌そうな顔をする。テストと聞いていい顔をする者など、いないだろう。――――でも。
「お前みたいに、テストでもないと勉強しない奴がいるからだろ」
「お前と大して変わんねーって」
「変わるから！」
さっきの褒め合いはどこえやら、またも美湖を挟んで言い合う。
「ほら、美湖が困ってんじゃねーか」
そっと後ろへ後退りしていた美湖を引きあいに出した。
「お前だって散々言ってたくせに」
瞬の言葉が事実だったため黙り込んだ俺の隙をみて、美湖がさっきと同じく、大きめの声で言った。
「ここで、終わり」
・・・・・・美湖が来て、2人の言い合いを止める人が出来て、良かった。
「よし、そろそろ帰るか」
もう辺りはすっかり暗くなっている。まだ手元が見えるうちにスケッチブックと鉛筆とを片付けて、立ち上がる。
瞬とはここで別れた。今日は近道で帰ると言う。
「じゃあ、明日な」
「おう、じゃあ」
美湖も手を振って、2人で歩きだした。
あの犬のところが近付くと、美湖は俺の右側、犬から離れた方に移動し、前を通る時もうつむいて目を合わせようとしなかった。その姿がなんとなく可愛くて、思わず笑ってしまう。
「別に、柵があるんだから」
案の定吠えたてられて、自分のスカートの裾を握りしめている美湖に言うと、「だって」と口ごもる。　その様子にもう一度笑って

いるうちに、家に着いた。
「じゃあ」
と帰ろうとすると、後ろから声がかかった。
「明日の朝も・・・・・・来てって言ったら、図々しい・・・・・・・かな？」
「犬、そんなに怖い？」
逆に聞き返した俺に、顔を赤らめて美湖がうなずく。
「じゃあ、今日と一緒ぐらいの時間で」
俺が言うと、心の底からホッとしたような顔で笑った。
「また、明日ね」
そう言って、家の中に入って行く。あそこまで犬を怖がる美湖の心境が理解できず、無視すればいいものをと思いながら、俺も家に帰った。

第5章

「帰りも、一緒だったの？」
玄関に入るやいなや、母さんが声をかけてくる。
「う、うわ見てたのかよ」
・・・・・・一体いつから。密かにムッとしながら言うと、「別に、たまたま目に入っただけよ」と言われた。顔からして、嘘だ。完全に面白いような顔をしている。つっかかっても、さらに笑われるだけなので無視して、「なんかないの」と問いかける。
「なんか」が「食べ物」ということは、母さんは分かるはずだ。
「棚に何かしら入ってるでしょ」
その言葉に従って棚を覗きこむと、スナック菓子があった。それを掴んで、自分の部屋に上がって行く。さっさと着替えを済ませて、さっきの景色を覚えているうちに色付けをしてしまおう。
お菓子の包みを開けて、机の隅に置きながらさっきのスケッチブックを広げた。
いつも家で使っている色鉛筆を取り出して薄く塗って行く。次に、いらなくなったTシャツ――もはや「Tシャツ」という原型もとどめていないが――で軽くこすりながら、ぼかしていった。
前まではティッシュを使っていたのだが、知らないうちに破けて自分の指が汚くなるというミスを犯してからは使っていない。
その作業が終わってからは、だんだん濃くしていって、ぼかすという作業の繰り返しだ。空は、上を濃く、下を薄くするというように、グラデーション風にするといいと先生が言っていた。
そして、雲の分の色を消しゴムの角で消していく。俺が一番苦手として、嫌いな作業だ。
俺も嫌いだが、瞬は大嫌いだと言っていた。前に、やらせてくれと言われたのでやらせてみると、消すこと消すこと、もう「雲」どころではなく、ただの「失敗したところを消した」にしか見えなか

った。　瞬の色鉛筆嫌いは、こういう風に細かい作業がある、というのも理由の1つらしい。
次に、遠くの方の山を塗っていった。その次に川を仕上げて、隅の方に密かにある橋も塗る。
――――これで、完成だ。
瞬はどんな風に仕上がったのか、今から楽しみである。

何を思ったか知らないが、ふとカーテンの隙間から美湖の家を見てみた。ついでに、窓も開けてみる。
電気がついていなかった2階の部屋に灯りがともる。その部屋の窓があいて、――――美湖が顔を出した。　窓から身を乗り出して、外に手を伸ばしている。多分、雨が降っているか見ているのだろう。
そういえば今日は夜から雨が降るとか言っていた。
美湖がこっちを見たので、あわてて俺も手を伸ばし雨を見ているふりをする。
それでも目が合って、美湖が笑いかけてきた。無視するわけにもいかず笑い返して、小さく手を振る。美湖も振り返そうとして――――誰かに呼ばれたのか、部屋の中を振り返った。　またこちらを向いて、今度こそ手を振ると、窓を閉めてカーテンも閉める。部屋の灯りが消えて、誰もいなくなった。
俺も窓とカーテンを閉めて――――机に向かった。メモ用のノートを開く。
突然、あるイメージが浮かんできたのだ。まだぼんやりとしてハッキリ分からないが、なんとなく。
どうせ何回も消すだろうし、そしたら画用紙がボロボロになるのでとりあえずこのノートでイメージをハッキリさせようと思ったのだ。
だんだん、それは天使と言う事が分かってきた。・・・・・・自分の絵に対してこんな言い方をするというのも、不思議な話なのだが。

霧がかった場所に、座りこんでいる天使。
なぜこんなのが浮かんできたのかは、分からない。分からないけど、それはそれでいい気がした。
輪郭を描いて、顔のパーツを描いていく。一番最初に描く目が、一番好きなところだ。鼻は、あまり好きじゃない。口は・・・・・・一番嫌いなところである。
顔のパーツが終わると、次は髪、巻き毛を描いていった。天使といえば巻き毛、と思うのは俺だけなのだろうか。
そこまで終わって、どこかで見た顔だなと俺は首を傾げた。それが誰なのか気付くのに、そう時間はかからなかった。
――――――美湖だ。
あわてて色鉛筆をひっつかみ、髪を金色に、瞳を青にしていく。金髪の巻き毛に青い瞳、これこそ俺の天使の象徴だ。
だいたいの色つけが終わると、あとは髪に茶色とかを加えて「髪っぽく」したり、目にいろいろと混ぜて「目っぽく」して生気をつけていく。
「――――――出来た」
ふと時計を見上げると、短針は1を指している。
「もう1時・・・・・・」
呟いて気付くと、夕飯も風呂もまだだ。下に降りてみると、机の上にラップをした夕飯がある。
レンジに入れて、その間にお箸を出しておいた。
お風呂場で音がする。母さんは12時には寝てるし、きっと父さんだ。
夕食が温まったのでさっさと済ませてしまう。もう寝る寸前の状態で箸を動かし、風呂をすっぽかしてしまおうと思ったほどだ。でも、それはさすがに汚いのでやめておいた。
父さんが風呂からあがったようだったので、よろよろと風呂場に歩いていく。その途中に、父さんに
「ほどほどにしとけよ」

と言われた。何が、というのはもう省略してある。いちいち言わなくても、少なくとも家の中では通じるので、誰もわざわざ言おうとはしない。
　それにうなずいて、風呂へと入る。やっぱり、頭と体を流すだけで出ることにした。こんなときに泡を出して洗う気にもなれなかったし、今日体育はなかった。――という問題でもないのか。
　パジャマに着替えて部屋に戻ると、父さんがスケッチブックを眺めていた。
「うわ、いたのか」
若干驚いて言うと、「勝手に入んなよとか続けるか？」と返ってくる。
「いや、続けるつもりはない」
「続けられても応じない」
　この無駄なやり取りのあと、少し気まずい雰囲気が流れた。父さんがずっと絵を眺めていて、その「感想」的なものが全くといっていいほど顔に現れないので、下手だと思われてるのか満足なのか何も思わないのか読み取れなくて、なんだか緊張した。
「・・・・・・お前、久しぶりに見たら上手くなったな」
　ぽそりと父さんがつぶやく。安堵の息を吐き出して、俺は答えた。
「別に、みんなそんなもんだし」
瞬や、美術部の他の奴らの絵を思い浮かべてみる。うん、その中で特に「上手い」わけでもない。
「周りじゃなくて、前と比べてって言ってるんだ」
　前っていつだよ。そりゃ、小学校の頃と比べたら進歩しただろうけど、中1からとなるとよく分からない。
「最後に見たのは・・・・・・そう、これだ」
　父さんが棚から過去のスケッチブックを引っ張り出してきて、あるページを開いた。
「・・・・・・あ」
　それは、父さんの顔だった。確か・・・・・・小6あたりに描い

たものだ。
　描けよと言われて、最初は嫌々だったのが色付けの段階になると夢中になった、、記憶がある。
「ほら、やっぱ上手くなった」
その絵とさっきの天使の絵を隣に置いて父さんが言った。
「そりゃ、小6ぐらいのなんだから上達してないと困るよ」
その答えが聞こえたのか聞こえなかったのか、父さんは答えなかった。
「まぁ、なんでも上達してたらいいもんだ。こんな時間に悪かったー」
　無意味に語尾を伸ばしたのは、父さんにも睡魔が襲いかかっているからか。
「うん、おやすみー」
　いいつつ俺もベッドに倒れ込む。

こうして、なんだか長かった今日は終わった。

第6章

今日の朝も、俺は美湖の家のインターホンを押した。
「今日は・・・・・・えっと、美術室行くんだっけ」
俺が言うと、美湖が嬉しそうにうなずく。
「・・・・・・そんなに見たいの？」
と聞くと、またもうなずいて言った。
「光っていつから絵描いてるの」
――――――まさか、その当時のから見たいとか言いださないだろうな。
そんな不安に駆られながらも、「真面目に描いてたのは多分、小5くらいだと思うけど」と答える。
――――と。
「見せてよ」
「・・・・・・」
一瞬の沈黙。
「多分、期待裏切るからやめた方が美湖のためだと思うんだけど」と言うと、「じゃあ、期待してないって言っとく」と返ってきた。ちょっと待て、「言っとく」ということは内心では期待してるということではないか。
――――やめろ。
「いや、本当に」
俺があわてたのを見透かしたように、美湖がいたずらっぽく笑った。
「今日、家いい？」
なんでこうなる。
「散らかってるから、また今度な」
具体的な日にちを言わずにはぐらかそうとすると、「今度っていつ？」と突いてくる。
「今度は今度」

「いつになったら片付くの？」
「無期限」
「ていうか、そんなに散らかってるの？」
一晩で妙に強くなりやがって、コイツ。
心の中で毒ずきながら、今日母さんに家にいたっけとか考えてみる。いや、今日は父母共仕事だったはずだ。おまけに、父さんは遅くなると言っていた。
「・・・・・・絵、見るだけだからな」
ボソッと呟くように答えると、今まで見て一番嬉しそうな顔で大きくうなずいた。
美湖の交渉の間に、あの犬のところは通り過ぎていた。
そして瞬と合流して、また「美術室で・・・・・・」という話題がぶり返される。

「楽しみじゃない」ことがあると、時計の針は異様なほど速く動くものだ。
気付けばもう放課後だった。今日は瞬のクラスの方が終わるのが早かったらしく、３組に顔を出してくる。
「美術室、どこ？」
美湖が聞いた。
「こっちー」
瞬が言って歩き出すが、「鍵、いらねぇの？」という俺の言葉に立ち止まった。
「先生、どこだろ」
と瞬が首をかしげる。
「先生に言ったらダメって言われないかな」
美湖が恐る恐る口を開いた。
「うーん・・・・・・他の先生ならダメだろうけど、多分アレなら大丈夫」
俺は自分で言ってうなずいた。うん、物分かりいいし。・・・・・・

改めて考えると、かなりなめてるな、俺。　・・・・・・いや、これはなめられる態度をとる先生が悪い。俺は、悪くない、はず。
　1人で納得して、1人でうなずく俺を美湖が面白そうな顔で見ていた。なんだか、やたらといらないところを見られている気がするのは気のせいか。
「てことでさ、鍵借りに行こう」
気を取り直すようにそう言い、美湖を引っ張るかのようにして職員室に行く。
　案の定、先生は「ちゃんと返せよ」と言っただけであっさり貸してくれた。
　美術室に近づくごとに、美湖の目が見て分かるくらいに輝いていく。そんなに楽しみか、そんなに期待するもんでもないぞ、とそっと俺はため息をついた。
「すごい・・・・・・」
　美術室に足を入れるなり、美湖がつぶやく。何がと思うが、美湖曰く「雰囲気が」らしい。
「これが、俺のな。で、こっちが光の」
　そう言ってる間にも瞬が棚から袋を出し、美湖に渡す。早速美湖は1枚1枚見始めるわけだが、自分の絵を自分の前で見られるのは苦手――――ハッキリ言うと、反応が「恐ろしい」――――なので、さりげなく離れて他の奴の作品を見てみたりする。もう仕組みも考えも聞いた作品を見て、「どうなってんだコレ、すげぇ」とかつぶやいたりして。
「やっぱり、2人ともすごいよ。上手いって」
　ふいに、美湖が顔を上げた。そして周りを見回し、もう一度いう。
「でも、ほかの人のもすごいよね。うん、美術部はすごいんだ」
美湖の出した結論に、思わず瞬を顔を見合わせて苦笑する。
　そんなこともないぞ、と横目でめったに顔を出さない1年の、部屋の隅に押しこまれるように置いてある作品を捉えて思う。
　そのあとも、先輩の作品とかを見て下校時間まで過ごしたあと、

鍵を返しに行って家路についた。
瞬と別れ、しばらく黙って歩いていた時、ふいに美湖が口を開く。
「家、本当にいいの？」
美術室であれだけ興奮していたので、もしかしたら忘れたかな、忘れてたらいいな、と密かに期待してみたのだが、甘かった。でも、一度いいと言ったのにここで断るわけにもいかず、うなずく。
美湖の目は、家に近づくごとに見て分かるくらいに光を増していった。
――――――さっき以上に。

第7章

「なんだ、どこも散らかって・・・・・・ないんじゃ、ない？」
部屋に入るなりそう言った美湖は、目が机に止まった瞬間、言葉につまった。
「で、えーっと。昨日・・・・・・今日か、父さんに見せたから結構出しやすい・・・・・」
とつぶやきつつ、当時のスケッチブックを引っ張り出す。ついでなので、今までの絵を――――ただの画用紙や、落書き含め全部――――床にぶちまけた。
「すごい、いっぱい・・・・・・」
目を――――もはや「らんらん」と輝かせながら、一番古い日付のものから見ていく。
「これ、小5の時の？」
その問いにうなずくと、「今の私より上手いな」とつぶやいた。
「嘘、美湖っていかにも『絵がうまい』って顔してるじゃん」
と俺が言うと、フッと笑って何それ、と言う。
喋ってる間にも美湖は絵を見る手を止めずに、やがて小6のときの、父さんの絵に目を留めた。
「これ、お父さん？」
「うん、そう」
ふーんとうなずいて、「朝、何時くらいに仕事行ってるの？」と聞いてくる。いきなり何をと思いつつ、「8時くらいだと思う。たまに一緒になるし」と答えると、いたずらっぽく笑って「比べちゃお」と言った。
――――どこまで探ったら気が済むんだコイツは！
昨日の無口でおとなしい美湖が既に懐かしいものとなっている。
「そこまで来ると犯罪行為になるぞ」
と言ってみると、「大丈夫、捕まった時は全部を光のせいに・・・・

・・」となんとも涼しい顔で言った。なんという、ここまで目鼻立ち整った女の子がそんなこと言ったら、警察など何も疑わずに俺を悪者扱いするではないか。
「そんな不安そうな顔しないでよ」
美湖の声が少しだけ細くなる。あ、昨日のが帰ってきた。
「え、別にそんな顔してたっけ」
「してたよ」
そこまで言って、またうつむいてスケッチブックをめくりだす。
「人、少ないね」
と言われるので、「風景の方が好きだから」と答えた。
そのあとも度々こちらを振り返りながら、絵を見て、古いスケッチブックがどんどん美湖の隣につみあがって行く。
そのまま、何分過ぎたかは分からない。昨日父さんが見てた時のように緊張した。
「・・・・・・これ、天使？」
ふいに美湖が口を開いた。
昨日の夜、描いたものだ。――――もうそこまで見たのか。
「そう、天使」
「どっかで見たことある顔・・・・・・」
美湖のつぶやきが聞こえて、俺は身を硬くした。気付かなくていい、本当、気付かないで。
「鏡、ある？」
いやだから気付かないでって。　そう思いつつも、貸さない言いわけも見つからずそこらに落ちてた手鏡を差し出した。
「うーん・・・・・・似てるような似てないような。これ、誰モデル？」
「特に誰でもないけど」
「いつ描いたの？」
「そんなに探らなくても」
「いつって」

妙な迫力だけはあるんだな、こいつ。
「・・・・・・昨日の、夜」
「窓で手振った時？」
「・・・・・・うん、そのあとすぐから」
絶対、ばれた。いや、でもばれたって言ってもそれを意識したわけではない。
「気のせい、かな」
ふいに、そう言う。俺は、安堵の息をついた。いつしか手汗がじっとりとついている。
「何が？」
念のため聞いてみると、美湖は恥ずかしそうに笑って言った。
「いや、どことなく私っぽいなって思ったんだけど。自意識過剰だよね、ごめんね」
謝らなくていい、事実、俺だってそう思ったんだから。
いっそそう言ってしまおうかと思ったが、なんとなく、やめておいた。
「どうする、これで一通り絵は終わったんだけど。・・・・・・美湖も美湖で、疲れただろ」
おそらく２０００枚くらいあるだろう絵を一つ一つ見ていったのでは、コンクールの審査員気分を味わったのかと思われる。
「別に、楽しかったし疲れたってこともない」
――――――すげぇ。
率直に、そう感じた。
その時、突然携帯が鳴って美湖がビクッと肩を震わせた。その様子に笑いながら携帯を広げてみると、母さんからのメールで「遅くなる」とあった。母さんもか。と息をついて、メールの続きを読んでみると晩ご飯は自分で作れ、と。
「なんだったの？」
美湖が聞いてきた。
「母さんが、遅くなるから飯自分で作れってさ」

そう言って携帯をベッドの上に投げ出すと、「作れるの？」とまたも質問を重ねてくる。
「冷凍を適当に」
美湖は、ちょっと待っててと言い残して家を飛び出して行った。
「これ、どうするんだよ」
残された俺は床に散乱した絵を見てつぶやく。
「まぁ、美湖も片付け場所なんか知らないしな」
続けて独り言。そのまま裏に書いてある日付を見ながら、順番に重ねていった。
何分経ったかは分からないが、また美湖がピンポンも飛ばして部屋に走って戻ってきて、言う。
「晩ご飯、私ん家来る？」
「――――へ？」
間抜けな声が出て、美湖が困った表情をする。
「迷惑かな？」
「いや、全然そんなこともないんだけどさ、こっちこそ迷惑じゃない？」
だって。美湖とはこの2日で結構仲良くなったと思うが、お母さんとは大した関わりもないし、今日の――――晩ご飯の準備の時間に――――夕方、いきなり言われても材料的な問題でやっぱり・・・・・・迷惑だろう。
「ううん、全然。お母さんぜひって言ってたから」
「・・・・・・じゃあ、お邪魔しようかな」
思えば、1人で冷凍食品をもそもそ食べると言うのも悲しい話だろう。それに、なんといっても、冷凍食品というのはお弁当のおかずの1品に入れるものではなかったのか。
「うん、じゃあ家で待ってるから」
そう言ってまた部屋を飛び出していき――――突然、顔を出した。
「あ、絵・・・・・・ごめんね、片付けるの忘れてて」
俺が言い返す間もなく、また階段を駆け下りていった。

俺も着替えようとタンスを開けて、しばらく悩んだ後、結局手前の方にあったのを着て美湖の家に緊張しながら向かった。

第8章

「どんどん食べてね」
と言われ、俺はとりあえずうなずいた。
　机にはテーブルクロスが掛けてあり、その中心には花瓶があって・・・・・・今からパーティでもはじまるのかという感じだ。でも、電気はオレンジっぽい暖かい雰囲気で特に高級感があるわけでもなく、ものすごく落ち着ける空間で――――なんとも、美湖の雰囲気とあう気がする。
「・・・・・・美味しい」
ポテトサラダを口に入れた途端、思わずつぶやいた。
　いかにも「料理が上手い」という顔をしているお母さんだが、本当に料理上手だ。
「そう？良かった」
「お母さん、去年までレストランで働いてたもんね」
美湖が言う。なるほど、それなら料理が上手いと言うのも道理だ。
「すごいですね・・・・・・俺の、あっと僕の・・・・・・母さんにも見習ってもらいたいです」
　そういえば前にも、俺と言いかけて僕と言い直したことがあった。そして、言ってから思ったが「レストランで働く」のを見習うも何も、無理だろう。
「見習うって、そこまでじゃないわよ」
　少し頬を赤らめて言うところは、本当に美湖とそっくりだ。
　でも実際に、出された料理は全部美味しかったし、「食後のデザート」とか言っておかれたアイスもフルーツがいろいろと乗っていて市販のとは思えないようなものだった。
「そういえば、光君って絵が上手いの？」
　美湖が光と呼ぶからだろう、お母さんは本名が光と思ったのかそう呼んで言った。

「え、いや全然、本当下手ですよ」
あわてて否定すると、「上手いから」と美湖が言う。
「あれのどこが！」
「光の小5くらいの時のが今の私より上手いんだってば」
と、またさっきの言葉を繰り返した。
「いつも美湖から聞いてるし、本当に上手いのよね？」
自分の言う事をねじ込むような言い方も、この親子は似ている。
「いや・・・・・・多分、美術部の他の奴の方が上手いと思いますよ」
――――文化祭で比べてみろ。そしたら、分かるから。
そう思いつつも、誉められて嫌な気はしなかった。
「そうなの・・・・・・かなぁ」
美湖は首をかしげつつも、納得したのかしないのかという顔をしている。
「そうだ、光を部屋に上げてもいい？」
雑談を交えながらアイスを食べ終わった頃、美湖が言った。
「いいわよ。光君が家の方、大丈夫なら」
「でも・・・・・・本当に大丈夫ですか、こんな遅くまで」
だって、さっきは絵という強い味方・・・・・・というのはおかしいか、でもそんなのがあったが。
部屋で女の子と2人きりだなんて、そんなことで喜べる性格ではない。
「大丈夫、全然、大丈夫だから」
――――だって、部屋にあげてもらったんだからあげかえさないと。
そのあとの言葉は呑みこまれたが、多分こんなことを考えたのだろう。
半ば引っ張られるように美湖の部屋に入って――――思わず俺は声をあげた。
「す、すげぇ」

全体が白で統一されていて、何かが、すごい。日頃こんな部屋で生活している美湖が、いきなり俺みたいな部屋に入るときっと引いた・・・・・・だろう。
「めちゃくちゃ綺麗じゃん」
その言葉に、美湖は首を傾げた。
「どこが？」
やっぱり、これが普通と思ってしまった奴は違う。――――いや、ということは俺の部屋はかなり汚い部屋ということになって、やっぱり、うん、引いただろうな。
微妙にへこみつつ、「この絨毯だの、タンスだのベットだの・・・・・・」と数え上げていくと、
「全部？」
と苦笑された。
「うん、全部。全体的にめっちゃ綺麗。うわぁ、美湖のこと部屋に入れたのってやっぱ間違いだった」
今さら言っても仕方がない後悔の念を口に出すと、「なんで？」と聞かれる。
「だって、毎日こんな部屋で過ごしてる人がさ、いきなりあんな殺風景な部屋に入ったら逆にビックリしたりしない？」
と答えると、「私はあんなのも好きだけどなぁ」とつぶやいたのが聞こえた。
そのあと、ふかふかすぎるベットに腰掛けてしばらく話し、ふと時計を見上げると9時を指していたのでもう帰ることにする。
「じゃあ、お邪魔しました。晩ご飯、美味しかったです。ありがとうございました」
玄関先で美湖のお母さんにそう言い、美湖に手を振って家へと入った。
なんだ、初めて会った時に、お母さんのことをものすごく頭下げる人だな、とか思ったけどそれは単に緊張してただけだと分かった。本人がそう言ったわけではないが、今日は普通に話してくれたし、

きっとそうだろう。
それでも、会話の中でやたら「毎朝迎えに来てくれて」という件についてお礼を言われた。
「毎朝」といってもまだ2回だけどな、と苦笑しながら返事をしたが、これから卒業までこんな日々が続いていくと考えると、本当にそういくのかと何かが引っ掛かる。
そうなればいいと、どこかで思った気持ちは無視しておくことにした。

第9章

家に帰ると、まだ親はいなかった。会社に泊まるんじゃないだろうな、などと考えながらそのまま風呂に入り、寝てしまう事にする。
「寝てしまう」と言っても、時計を見ればまだ１０時だ。そう簡単に眠りにつけるはずもなく、結局起きて適当に床に積み上げられた過去のスケッチブックを見返してみることにする。
新しく絵を描く気は湧いてこなかった。
「うっわー、下手くそ」
本当にそう思うものばかりで、笑ってしまう。それでも印象深い絵は描いた当時のことも覚えているし、あの時は確かに「いい出来」と思ったのだ。
俺が大人になったとき、あの天使の絵や川――――――「空」メインだといいつつも――――の絵を見て、「下手」とつぶやくようになるのだろうか。
そう言いたいと思った。そう言えるほど、上手くなっていればいいと思う。
そして、その「下手な絵」を美湖がどんな気で見たいのかもなんとなく気になった。
「これを・・・・・・上手とか言えるかな」
でも、美湖は口からでまかせを言うような性格ではない。2日しか接していなくても、なんとなく分かる。
「ただいまー」
下から母さんの声が聞こえた。とりあえず、降りてみる。
「晩ご飯、食べた？・・・・・・あれ、食べた？」
普通に聞きつつも、食器を使ったあとがなくて戸惑ったようだ。
「食べた。なんか、美湖ん家に呼ばれたから、食べてきたんだ。美味しかったよ、お母さんがレストランで働いてたことあるって」
すごいね、というつぶやきが聞こえる。

「お礼、しとかないとね」
「美湖曰(いわ)く絵見せてもらったお礼だとさ。・・・・・・でも、晩ご飯と絵って全然格が違うよな」
ボソッと付け加えた俺に、母さんもうなずきかけ――――尋ねた。
「絵って、いつのから？」
さっきの発言は、自分から「美湖を部屋にあげた」という爆弾を仕掛けたものだと思ったが、そこは突っ込まれなくて助かった。
「小５。真面目に描き始めたころから」
「美湖ちゃん、疲れたでしょうね」
母さんの言葉に俺もうなずいて、さっきの会話、「美湖が疲れなかった」というのを伝える。
すごいね、ともう一度つぶやきが聞こえた。結果的に、「水野さん家はすごい」ということだろう。
「で、あんたはもう寝る用意も出来たわけ」
母さんの問いにうなずいて、「寝ようとしたけど無理だった」と答える。
「そりゃ、毎日１２時に寝てる人が・・・・・昨日の夜は１時に寝たような人が１０時半に寝ようとしても無理でしょ」
ごもっとも。なぜか、いつも母さんの言葉には妙に納得させられる。
「でもまぁ、早く寝るのに悪いことはないんじゃないの？私お風呂入ってくるからね、寝るなら寝ちゃえば」
かなり他人事のような言い方だが、実際とりあえずは「他人」なのだから仕方がない。
「うん、寝てみる。おやすみー」
なんだか、寝ることは出来る気がした。

次の日の朝もいつも通りの日々が過ぎて行った。
そのまま金曜になって、例のテストがある。俺も、もちろん瞬も全く勉強などしてなかったし、美湖もしていないと言っていた。――

――美湖は元々優秀なので、俺たちと一緒に考えるべきでないのは言うまでもない。
案の定、美湖はテスト中もそんなあわてた様子はなかった。俺はというと、本当にさっぱりだ。ふと右隣を見ると、岡本も机にうっぷつしてあきらめた様子である。
どうせ成績には、「意欲関心」にしか入らないんだし適当に答えでも書いておけばいいということで、明らかに間違っている、それらしい式を書いてみた。まぐれで1つでも当たっていることを願い、あとは運任せである。
数学はこんな感じだったのだが、社会はほとんどが4択だったので適当に選びつつ、すいすいと進めることが出来た。「4択って素晴らしい」と思うのは毎度のことだ。

そのまま1週間が過ぎ、テストが返ってきた。
結果は予想通りの無残な点数だったが、「意欲関心だもんな」と同じく無残だった岡本と頷き合う。
「勉強していない」と言っていた美湖の点数を覗きこむと、俺の2倍ほどの得点だった。
「ちょ、美湖お前、勉強してないとか本当に嘘だろ！？」
「いや、本当に何もしてないんだって」
このやり取りを見ていた岡本が、「日頃から復習してるからじゃないの？」と口をはさんでくる。
なるほど、それなら普通に納得だ。　1人でうなずいた俺を見て、美湖が不本意そうな顔で反論してきた。
「別に、してないよ？」
「じゃあ、元々の本能だよね」
美湖の言葉をあっさりと岡本が蹴る。口を尖らせて、しかし言い返す言葉も見つからなかったのか、美湖が黙り込んだ。
「本能って、動物かよ」
俺の言う事を、岡本はきょとんとした顔で聞いている。

「人間って、動物でしょ？」
確かに動物ではあるけど。なんか・・・・・違うだろ、うん。
「ちょっと違うけど、とりあえず動物なんじゃないかな」
美湖も言い始めて、いきなり俺は自分の意見に自信がなくなってきた。
そりゃだって、テストで自分の2倍以上の点をたたき出している秀才がいるのだ。これを信じないでほかにどうしろという。
「ほらーっ」
自信たっぷりな顔と声で岡本が言ってきた。
「ちょっと違う、っていうのを聞き逃したか、お前」
さっき「信じる」と確かに思ったが、こんな顔をされたらやはり言い返したくなるものだ。
その時、先生が終学活をはじめるというので、プツリと会話は途切れた。

第１０章

「今さらだけどさ、瞬は川の絵、どうなったんだよ」
ある時、美術室で瞬に聞いてみる。
「本当、今さらだな。・・・・・・俺も、忘れてたけど。うん、まぁまぁの出来だと思うけど。特によくもなく、悪くもなく。光は？」
「俺も、そんなところ。美湖はよっぽど感激したらしいけど」
美湖が家に来た時、もちろん川の絵も見たわけだが、本当に激賞だった。特に空が好き、とかなんとか言って。空がメインだとか、この時間の空が好きだとか話してた時に美湖はいなかったわけだから、特にお世辞というわけでもないと思う。
最近、案外誉められることは悪くないと思うようになってきた。
今は、下書きも何もなく、だからといって案が出るわけでもなかったので瞬と窓際で話している。
互いに家で描いた絵のこととか言いあいながら。
「光ってさぁ、人描いたことある」
瞬の問いに、俺はうなずいた。
「この間」
頭に思い浮かべたのは、あの天使。天使は人かと聞かれると迷うが、絵のジャンル的には人の絵になるはずだ。
「誰？」
「天使」
「へ？」
瞬が窓枠から体を起こした。
「そりゃまた、なんで」
なんでって言われても。――――思い浮かんだからだよ、そりゃ。
「なんか、出てきたから」
思った通り答えると、納得したのかしないのかという顔をした。
「・・・・・・暇だな」

瞬がつぶやく。
「帰る？」
「帰ろか」
美術部とはかなり自由な部活なので、することがないなら帰ってもいい。というか、週に1回、気が向いたときに顔を出せば誰も文句は言わない。「あくまでも趣味を尊重する」部活なのだ。好きで絵を描いてるんだから、下手でもなんでも楽しけりゃいいじゃないか、みたいな。
「ちょっと、やることないんで失礼します」
先輩たちに声をかけて階段をおりる。
「美湖ちゃんは。先帰ったの」
瞬が聞いてくる。俺はうなずいた。
「犬にも慣れたって。ていうか、1週間くらいで犬が吠えるのやめるから怖くなくなったらしいよ」
初日、「1週間もっ」とショックを受けていたが、案外すぐだったね、と今朝笑っていたばかりである。

家に着き、玄関を開けようとすると美湖が向こう側から歩いてきた。持っているものからすると、買い物の帰りか。
俺が手を振ると、美湖も振り返してきて走ってきた。「走ってきた」といっても荷物が重いようでかなりよたよただ。
その姿を見て、なぜかあの場所が思い浮かんできた。あの場所はというと、俺が気に入っている場所の1つだ。綺麗で、木に囲まれている大きい池。初めて行った時は本当に感激した。美湖なら、きっと純粋に喜ぶはず。
息を切らして、美湖が笑った。
「本当、これ重すぎて」
「そんなに疲れて、よく持って帰ってこれたな」
からかい口調でそう言うと、「そんなに力ないわけじゃないんだから」と返ってくる。

「あのさ、次の土曜、暇」
と聞いてみると、うなずいた。
「多分美湖が喜ぶと思うところがあるんだけどさ、一緒に行く？」
最後まで言い終わらないうちに「行く」ともう一度うなずいた。
「喜ぶって、どんなとこ？」
「それは、まだ」
そう言って、俺は付け加えた。
「これで、晩ご飯の分はチャラな」
美湖が「へっ？」と声を上げる。
「別に、気にしてなかったもん」
「お前がよくても俺がダメだったんだよ」
ふぅーん？と美湖は首を傾げた。本当にこいつは疑問形が多い。
「まぁ、そういうわけだから、とりあえず。じゃあ、明日な」
土曜といえば、明後日だ。

第11章

ピンポーン
今日も俺は、美湖の家のベルを押した。　しかし、今日は学校に行くためではない。
「おはよう、一瞬今日学校だっけ、ってビックリしちゃった」
いつものようなはにかんだ笑顔を見せて、美湖が言った。
「俺も、なんでベル押してんのかちょっとだけ悩んだ」
それだけ言うと、俺は自転車にまたがって美湖を促す。
美湖もうなずいて、俺たちは池に向かった。
　子供づれが多い公園を抜けて、その先の木の並木を抜け、さらに奥の森に入ったその先に池はある。
「本当、すごい」
　その池があるところに入るなり、美湖が声を上げた。――――
俺も、はじめて来た時はこんな風に声を上げて、父さんが笑って。
「お楽しみって、これ」
俺が言うと、美湖が振り返って満面の笑みを浮かべる。
「私、喜んだよ」
「なんだよそれ」
吹きだした俺に、美湖がきょとんとしたように言った。
「だから、光が昨日『美湖が喜ぶ』って言ってたからさ、なんていうか、期待通りに喜んだよ、みたいな感じで」
　まったく、美湖の考えてることは本当に分からない。
「・・・・・・でも、これなんとなく見たことある気がするんだけどな」
首を傾げ――――「あっ」と声を上げた。
「何」
「絵だ。うん、光のスケッチブックに載ってたもん。結構前のやつ」
絵通りに、青緑で澄んでて綺麗、と美湖のつぶやきが聞こえる。

絵・・・・・・そうだ、父さんが俺をここに連れてきたのはこの絵が目当てだったのだ。絵を、描かせたかったのだ。何を隠そう、俺に絵を描かせたのは父さんだ。美大に通ってたとかなんとか言って、なぜか俺にも絵を教え込んできた。――――まぁ、絵が好きだからいいのだが。

「そういや、描いてた」

俺が言うと、「今日も、描ける」と聞いてきた。

「まぁ、持ってきてはいるけど」

鞄を覗きこんで1人でうなずくと、「描いてもらえないかな」と言う。

「別に・・・・・・いいけど、なんで」

「光が絵描いてるとこ見るのが好きだから」

ニコッと笑って、美湖が言った。

「ふーん・・・・・・」

そんないいものなのかな、など思いつつ池の周りをグルグル歩いて、一番いい場所を見つけて座りこんだ。美湖がこちらに来ようとしたが、「そこにいといて」と制する。

首を傾げたが、何も言われなかった。

見られてるなどと思ったら緊張して何も出来ないので、ただスケッチブックと池だけを見つめて描き続けた。無心に、ずっと。

――――密かに美湖も入れた、というのは内緒である。美湖を、といっても単に「女の子を」というだけだったのだが。

下書きが出来たところで時計を見ると、1時間半たっていたことを知った。でも、まだ色を塗っていないので時間をかけた割には簡潔だ。絵具で池の水の部分に色をつけていくまでは、さすがの美湖も「上手い」とは言えないはずである。

道具一式を持って美湖のところへ戻ると、案の定「見せて」と言われた。

「ダメ、色塗ってから」

と言うと、「なんで」と口を尖らせる。

「だって、水なんかは白黒だとしょぼいもん」
と答えると、「大丈夫、光だし」と言われた。
「どういうことだよ、それ――――まぁ、何を言っても明日か明後日には仕上げてくるから、待ってて」
そう言うと、少し残念そうだったがうなずいた。
俺の中で、この絵は天使の絵の次に大切になりそうだった。
絵も描いたわけで、特にすることもなく池の淵に座ってしばらく話していると、ふいに美湖が黙り込んだ。そして、少しの間考える素振を見せた後に口を開く。
「ここ、人来ないんだね」
「だって、並木抜けて森抜けて、って感じで結構町から外れてるし。知ってる人は少ないと思うけど」
と言うと、「瞬君は？」と突然瞬の名前を出した。多少驚きつつも、「知らないと思う」と答えると、美湖は立ち上がってのびをしながら言う。
「じゃあ、秘密基地っぽいものなのかな」
「そうかもな。俺らがいるときに、まぐれで知ってた他の人が入ってこなかったら」
そう言うと、美湖は嬉しそうに笑った。
「私、ちっちゃい頃から秘密基地的なもの憧れてたんだ」
「それは、俺も一緒」

今日、ここに美湖を連れてきて本当に良かったと思った。
そういえば俺の父さんはここを知っているわけだが、別に大丈夫だろう。

第１２章

それからは、至って穏やかな日々が過ぎていった。
西暦が２０１３年に変わったときに瞬と行った初詣の際に美湖と会った時は、去年と変わらない笑顔を見せてくれた。
２月は・・・・・・唯一、「穏やか」ではなかった気がする。バレンタインに、あわてて「義理だからね」と付け加えられたチョコを一口かじるなり、顔をしかめる結果に陥った。
おそらく美湖は、料理上手な母親に甘えてほとんど料理を学ばなかったと見える。
４月に3年になったときは、美湖とも瞬ともクラスが分かれて、3人ともバラバラになった。
それで学校での関わりが浅くなったからか、すっかり「他人のフリ」が定着しつつある。
そんなでも、俺たちの部活がない時にはクラスに顔を出してきて、一緒に帰ろうと微笑んでくるのが常だ。
あの池にもよく行っている。行くたびにその絵を描く訳だから、1冊スケッチブックが埋まってしまったほどだ。
幸運なことにも、俺たちが居座っている間に数少ないここを知っている人と鉢合わせすることはなかったし、このまま「秘密基地」が定着してしまいそうな感じである。
こんな日々がいつまでも続けばいいと思った気持ちは、今となってはそう無視するものでもない気がした。

第１３章（前書き）

究極の季節外れです、ごめんなさいｗ

第13章

「光ー描けた？」
美術室でふいに声をかけてきたのは瞬だ。
「あとここだけ。瞬は描けた？」
「うん」
「ゴメン、ちょっとだけ待って。あと本当にちょっとだから」
と俺が言うと、瞬はうなずいた。
今日は珍しく先生から課題が出ている。１つの像を前に、美術部一同ひたすら「描き」。一同といっても、もちろん幽霊部員寸前の１年はいない。
「出来た人から帰っていいってー」
課題を出すなりさっさとどこかに行ってしまった先生からの伝言を先輩が言った。
「よっしゃ、出来た」
俺が瞬に言うと、「じゃあ帰ろー」と早速かばんを持つ。出来あがった絵を机の上に置いて、廊下に出た。
「最近なんか暑いよなー」
近々の決まり文句をまた瞬が口に出す。
「最近もクソも、近頃は毎日言ってるだろ」
「それは、そうなんだけどさ」
そりゃだって、もう5月の終わりだ。うぅ、春の暖かさを楽しむ隙もなく・・・・・・クソ暑い夏がやってくる。
日が落ちるのも遅い、というのはそんなに嫌いでもないのだが、この暑さをどうにかしてくれるというのならこんな利点も喜んで返上するはずだ。
「じゃあなー」
気付けば、瞬との分かれ道だった。
「あぁ、また明日」

手を振って、家へと歩いていく。
そういや明日からは、夏服に変わるのだ。あまりの気温に予定より早くずらしたらしい。
隣を、すさまじい速さで飛ばしていく車が通った。マフラーから出る黒い煙に思わず咳き込んで舌打ちをする。
「あんなのがいるから、温暖化で余計に暑くなるんだろ、馬鹿」
聞こえるはずもない相手に野次を小声で――――小声ならもはや野次でもない気がするが――――飛ばした。
家について、入ろうとした時。

どこかで、悲鳴が聞こえた。

誰のかとかは、考えた気はしない。
気はしなくても、反射的に分かった。

どこで聞こえたかなんて、大体の方角しか分からなかったが、そんなのも考える余裕なんてない。
とりあえず俺は駆けだした。気付けばかばんは手元になかったが、かばんなんぞどうでもいい。そういえば今日は美術室にためていた絵をかばんに入れていたが、今となっては絵でさえもどうでもよかった。　絵なんか、描けば増えるじゃないか。あいつは、どんなに描いても、どんなにあがいても、１つしかないじゃないか。

まだ、救急車のサイレンは聞こえない。
気付いた奴、呼べよ馬鹿。
運動は得意ではなかったが、今ならクラス一足が速い奴でも抜かせるような気がした。

走って、走って、走って――――――――――――

サイレンが聞こえた。
視線の先には、人だまりがいる。野次馬を押しのけて、突き飛ばして、輪の中心の、今、まさに運ばれようとしてた奴は。
予想、外れろ。
外れた、違う、違わ――――――ない。
「美・・・・・・湖」
喉の奥から絞り出した声は、自分でも笑いたくなるほど掠れていた。
「水野さん家の、娘さんよね？」
どこかでおばさんの声が聞こえる。その言葉で、自分は美湖の親を連れてくるべきだったと後悔した。
救急隊員の人が野次馬をどけて、救急車を走らせる。
ここから一番近い大きい病院って、どこだ。そんなもの知らない。
生まれて大けがなんて負ったこともない。
野次馬がだんだん帰って行く。

俺は、その場に1人で立ち尽くしていた。

「何、ちょっとこけただけだろ。大袈裟に救急車なんか。病院でどうせニコニコ笑ってるんだろ」
自分を励ますためかは知らないが、そう呟いてみる。
病院が分からないんだから、がむしゃらに走っても仕方がない。
とりあえず、家に戻ることしかできなかった。
家に着いた時、美湖の家を見ると普通に電気がついていて、何も知らない様子だった。
――――言った方が、いいのかな。
でも、ぐずぐずと迷っているとダメだ。３０秒ほどで結論を出して、思い切ってベルを押した。
「はい。・・・・・・あ、光君。美湖知らない？買い物頼んだまま、まだ帰ってないんだけど会ったわけでもないか・・・・・・」
まさか、娘が事故ったとか――――――違うって、だから大袈裟な、

だけ。
「美湖、さっき見ました。救、急車・・・・・・で」
涙腺が緩みかけたが、グッとこらえた。そんな、俺よりもっと辛いはずの人の前で泣いたらダメだ。
美湖のお母さんの表情が変わった。
「何か、あったの？」
「俺は分かりません。家に帰ろうとしたら、悲鳴が聞こえて、行ってみたら、救急車があって」
すみません、とつぶやいた。
美湖のお母さんは首を横に振って、車を出してくると言った。病院に来るなら、俺のお母さんに伝えてきて、と。
もちろん同行することにした俺は、家の玄関から用件を伝えて返事も聞かずに外に飛び出す。
美湖のお母さんが開けてくれていた後ろの席に乗って、美湖のお母さんも準備をすると思いっきりアクセルを踏んだ。
――――――さっき野次を言った車も、もしかしたらこんな状況だったかも。
そうしょっちゅう事故が起こっていたら参ったものだが、ちらりとそんな思いが頭をかすめた。
それでも、今は見も知らぬ他人の心配などしてられない。
「光君、降りて」
病院について、駐車も乱暴なままにロビーまで駆けこむ。
制服はもうぐちゃぐちゃだったはずだが、そんなことを気にする余裕など残っていない。
「大袈裟なだけ、ホント、ちょっとこけただけ」
美湖のお母さんが受付の看護師に名前を言って、美湖のところに連れて行かれるまでずっと自分に、暗示をかけるように俺はつぶやいていた。
連れて行かれたところに、美湖は寝ていた。
ドラマとかによく出てくるあれ――――正式には「ベッドサイドモ

ニタ」というらしいが――――に書かれている数字は、かなり小さかった。なんだっけ、心拍数。

あれが0になったら機械的な音が鳴って――――いや、鳴らないから。ドラマの話だから、そんなの。今目の前でそんなこと、絶対起こらないんだから。

再び暗示をかけ始めて、見てられなくてきつく目を閉じた時、あの音が、聞こえた・・・・・ような。

「5月29日・・・・・・・」

医師がつぶやく声もして、「謹んでお悔やみ申し上げます」という決まり文句とともに看護婦たちもぞろぞろと去って行った。

美湖のお母さんが隣で泣き崩れたところを見れば、あの音は気のせいではなく、本当だった。

つまり、美湖は――――――――――

いなくなった。

泣きそうな、でも涙は出なくて、俺はずっと拳を握りしめていた。

犬に怖がったアイツ

やたらと絵を褒めてくれたアイツ

あの池を秘密基地とはしゃいで笑ったアイツ・・・・・・美湖。

たった今、俺は美湖が好きになっていたことに気付いた。

もうそれを言う事が出来なくなった直後にそれが出てくるとは皮肉な話である。

なんで今。

あの時、カーテンの隙間から美湖の家を覗こうと思ったたその時に、その行動から、さっさと気付いておけば良かったものを。

でも、それはもう遅かった。

美湖は、いなくなったのだ。
その現実を突きつけるように、病室には重苦しい空気が渦巻いていた。

第１４章

「光ってば」
下からお母さんの声がずっと聞こえてくる。
美湖のお通夜は今日あるようだった。出席しないといけないのだろうが、行ったら現実を突きつけられるようで恐ろしい。
「起きてるんでしょ？」
お母さんが部屋に顔を出した。
「悲しいのはそりゃ分かるけど、学校は行かないといけないんだから」
その言葉に、俺はしぶしぶ起き上った。行きたくはないが、最終的には行かないといけないんだし、ずるずると引き延ばしていると無駄に急ぐことになる。
出来るだけいつも通りにふるまおうとして、普通に着替えて普通に顔を洗い、普通に朝食を食べた。
今日は「普通の」水曜日だ。
鏡を見て、自分の顔にぎょっとする。泣き腫らした目は、見るも無残なものだった。
「行ってきます」
と家を出る。水野宅のベルに指を伸ばしかけて、「そういや今日、風邪だっけ」などとわざとらしい言葉をつぶやいた。
ずっと黙って歩いていくと、いつも通り瞬が後ろから走ってくる。
「光――――！・・・・・・あれ、美湖ちゃんは？」
瞬に罪はない。こいつは何も知らないんだから。それは分かりつつも瞬の態度に腹が立った。
「いねぇよ、そんなの」
ボソッと答えて、歩く速度を速める。
「そんなのって・・・・・・何か、あった」
瞬の表情がいつになく真面目になった。

「いっつも迷惑かけてるだけだけどさ、何かあったときぐらい、言えって。そんくらいの仲・・・・・・だと思うよ、俺は」
こいつになら、言ってもいいと思った。そう軽々しく口にすることでもないが、「幼なじみモドキ」だ。いつも調子のってる奴でもいざとなったら頼りになる。これが小1からの付き合いで分かったことである。
「・・・・・・美湖が、いなくなった」
「死んだ」だの、「亡くなった」だの、そんな言い方はしたくなかった。
「いなくなってって・・・・・・どこに」
怪訝な顔をした瞬に、少々嫌でもそんな表現をするしかないと悟って、最初から説明することにする。
「昨日の夕方、車に轢(ひ)かれて」
一度口をつぐんだ俺に、瞬は促すわけでもなく話を聞いているようだった。瞬の中でも答えは出たかもわからないが、「入院」と「手遅れ」は違う。
「病院で、亡くなった」
涙は出尽くしたからか、出てこなかった。
そこまで言った時、瞬が立ち止まる。俺は瞬を振り返って続けた。
「瞬と別れた後、普通に家に帰ったんだ。それで、入ろうとしたらどっかから悲鳴が聞こえてきた。誰のかとか、考える余裕もなかったけど直感的な感じで美湖だって思った」
「予想が外れたらよかったけど」と俺はうつむいてつぶやく。
「当たったんだな」
瞬が言って、俺に追いついてきた。俺の中指を握って――――なぜ中指なのかはこの際置いておくとして――――言う。
「大丈夫だった」
美湖が、じゃなくて俺がだ。
「じゃなかった。じゃなかったけど、お前に言ったら少しは軽くなったかも」

と答えると、瞬が弱々しく笑う。
「じゃあとりあえず、良かった。人が死ぬのは悲しいけどさ、そのせいで周りの人まで死ぬのは――――心が、ってことな。もっと悲しいんだから」
その言葉に答えるつもりで、俺は瞬の人差し指を握りしめた。
お調子者の、でもいざとなると力になってくれる友達を、ここまで大切に感じた日ははじめてだった。
「分かったよ――――ありがと」
俺の言葉に、瞬は嬉しそうにうなずく。
「でも・・・・・・いきなりだよな」
ふいに表情を暗くして、瞬が言った。
「交通事故だから・・・・・・・いきなりなんだよ。お通夜、今日の8時からだって。来れる」
瞬がうなずく。
「塾だけど・・・・・・そんなもの、どうでもいい」
どうでもいいで思い出したが、かばんは無事に帰ってきた。近所の人が家に持ってきてくれたらしい。
「制服だよな」
「うん、制服」
学校でどう話されるかは分からないが、絶対に泣かない。というか、泣けない。涙腺が崩壊しようとも――――泣かない、というのは矛盾しているわけなのだが。
「学校では、泣くなよ。弱いとこ見せるなよ」
俺の心を見透かしたように瞬が言った。
「泣かねぇよ、そんなの」
あぁ、泣かないとも。クラスの奴にそんなとこ見せてたまるか。
学校に着いた。ほとんどの人が美湖の訃報は知らないと思うが、近い地域の人は聞いたらしい、俺を気の毒そうに見てくる。なんでかって、恐らく毎朝一緒に登校してくるからだろう。
教室に入ると、このクラスでは全員が知らないようだった。みん

な普通に「おはよう」と声をかけてきて、自分たちのおしゃべりを続行する。
　チャイムが鳴って、先生が入ってきた。いつもと違う表情に、みんな戸惑っている。
「読書は今日はしなくていい。みんなに知らせがある――――――」
教室が静まり返った。
「2組の水野、美湖さんが昨日の夕方に・・・・・・」
聞いてられなくて、俺は耳をふさいだ。
「車に轢(ひ)かれて、亡くなったそうだ」
　誰もどんな声も、何の音も発さずに、教室はかなり重い空気に包まれていた。
「今から全校集会だから、学級長先頭にして廊下に整列」
いつもなら各自グダグダと喋りながらダラダラと並ぶわけだが、今日はさすがに素早く並ぶ。
　他のクラスも静まり返っていて、それは体育館に行っても同じだった。
「おはようございます。残念な知らせで・・・」
校長が言い始める。
「3年2組の――――――」
再び俺は耳を塞いだ。
　知らないうちに黙祷が始まっていて、この全校集会が終わった後は平常授業だった。
　こんな日に授業なんかしてられるか、とは思ったが、そんな早退するわけにもいかない。
ノートも書かず、教科書を眺めているだけだったが、とりあえず出席はした。
　美湖。2年のときはずっと隣にいた奴だ。人間はちょっと違うけど動物、といった奴。
　今は理科の時間で、ちょうど哺乳類だの鳥類だの、そんな感じの

単元だ。クラスの1人が質問する。
「人間って、何？」
「人間は霊長類で、動物かどうかといえば、ギリシアの哲学者、アリストテレスは『社会的動物』と言っています」
おい聞いたか、社会的動物だってさ。「ちょっと違うけど動物」って解釈、ちょっとだけ正解じゃないか。

そんなことをグダグダと考えつつ、今日の学校は終わった。

第15章

「南無佛陀耶・・・・・」

さっきからずっと、お坊さんがお経を唱えていた。

身内と、俺と瞬だけとあって、そんなに大人数でもない。すすり泣いている人もいるが、こんなところで涙は出てこなかった。ただ数珠(じゅず)を持って合掌しているだけ。美湖は隣にはいなかった。美湖は、前の方にいた。写真の中で小さく微笑んでいる美湖が、もう二度と俺の隣に来ることはない。

それが信じられなくて、だから涙も出てこないんだと思う。

だって。

現実感がなさすぎる。病院ではあの音が俺に現実を突きつけてきたが、今は何。お経は祖父の法事などで聞いたことあるものだし（種類が違うとかなんとかは知らない）周りの人がいくら泣いても、そんな人の死が分かるようなものでもない。

周りはみんな黒いスーツなどで、制服の俺たちは明らかに浮いていた。同系色とはいえ、やはり黒と紺は違う。浮いていたので、後ろの隅っこに座っていた。来てくれた方が多分美湖も喜ぶ、と呼ばれたとはいえ、身内の中に「友達」であるだけの遠慮もそれを手伝っていた。

お経が終わって、身内の焼香が始まる。身内もそうたくさんはいないので、すぐに俺たちの「参列者の焼香」も回ってきた。

それも終わると、お坊さんが会場――――――といっていいものかは分からないが――――から出て行った。

次に、「喪主」である美湖のお父さんの挨拶があり、それも終わると「通夜ぶるまい」が始まる。

みんなで食事をするわけだが、これで緊張しないわけがない。箸を伸ばすことさえもおっくうで、ずっと机の隅っこで瞬ともぞもぞしていた。そんな俺たちに気付いてくれた美湖のお母さんが、隣に

来て話しかけてくれた。
「美湖、ここに引っ越してきてから本当に学校が楽しくなったみたいだった。前の学校では、友達も少なくて内気だったんだけどね。見て分かるほどに、明るくなってたんだけど――――全部、光君と瞬君のおかげだと思う。ありがとう」
その言葉に、あわてて俺たちは首を横に振る。
「そんな、全然。明るくなったのは美湖自身で、そんな俺たちのおかげとか全然、うん、そんなんじゃなくて」
グダグダになったが、美湖のお母さんは美湖そっくりの顔で微笑んで続けた。
「いつも2人とも、絵がものすごく上手いって聞いてて。文化祭で見たけど、美湖の言うとおりね。学年での絵の中でも引き立ってたし、美術の中でさえもすごかったもの」
ここまで言って、表情が寂しそうな顔に変わる。
「そんな硬くならなくていいわよ」
と言い残して、美湖のお母さんは別のところに行ってしまった。その目の端には、光る何かが見えた気がした。
1時間ほど経ったか分からないが、お開きの前に俺たちは帰らせてもらう事にした。ほかの家族が1組、帰ったと言う事もある。そんな長々と居座っても迷惑だろう。
「今日はわざわざ、ありがとう」
出際に言われて、俺たちはまた首を振った。
「こちらこそ、ご家族だけだったのに失礼しました」
と言って、家へと帰る。
「光」
別れ際、瞬が声をかけてきた。振り返ると、続ける。
「そんなへこむなよ。悲しいのは、分かるけど。俺だって悲しいけど、今朝言った通りに」
その言葉に、俺はうなずいた・・・・・・つもり。実際うなずけてたかは分からない。

瞬が手を振って、俺も振り返す。
そのまま家に走って帰って――――
そのあとの記憶はないが、朝に見た顔からすると多分、今夜も泣きはらしたんだと思う。

第１６章

それからは、どう日々が過ぎていったのかは分からない。
ただ起きて、ごはんを食べて、学校に行き、授業の内容は頭を素通りして、部活には行かず、家に帰り、絵は描かず、またごはんを食べ、風呂に入り、寝る。
それの繰り返しで、かれこれ１ヶ月過ぎた・・・・・らしい。俺がめくらなかったので、母さんが毎月めくってくれていたカレンダーが正しければ、の話である。
そして、それを約２１０回ほど繰り返して、１年が過ぎた。なんだなんだで高校生になっている。瞬とは、同じ学校だ。
１年間、まるっきり絵は描いていない。描く気になれなかった。描いても、喜んでくれる人がいない。
――――美湖と出会う前は、そんな人などいなかったわけだが――

そんな矢先に、事は起こった。

――――・・・・・・う

光。光ってば。
雨上がりの夜中に、そんな声が聞こえた。母さんか？だとすればなんだ。
「何ーっ？」
後々思い返せばかなり不機嫌な声で俺は聞き返した。
『そんな嫌な声しなくても。せっかく来たのに』
どこかで聞いたことがある声がする。夢の中か。１年経って今さら、こんな夢を見るようになるとは一体何――――――
『夢じゃないよ、残念だけど』
いたずらっぽいあの声が、また聞こえる。夢じゃないと言った。じゃあ違うのか。

『ほっぺたつねってあげたいけど、ごめんね、出来ないんだ』
さっきの声からは打って変わって、遠慮がちな、出会った頃の声になる。
「――――――――美湖？」
囁くようにつぶやくと、笑った気配がした。
『やっと気付いた？』
なんとか目を開けてみる。俺の顔を覗き込む、あの頃のように笑った顔が見えた。
上半身も起こした。
「美湖。――――――本当に美湖？」
と尋ねると、何度言ったらわかるの、とまた笑う。
『本当に美湖。』
「でも・・・・・・なんで」
1人でつぶやいたつもりだったが、聞こえたらしい。
『心残りがあって成仏出来なかった・・・・・・とか言ったら怖い話みたいだけど。要約すれば、そんなとこだと思うよ』
心残り？何が、なんで。
『光の絵、見に来て。いきなり死んだから、本当にびっくりした』
俺の、絵――――――そういえば、絵が好きだった。色鉛筆で描いていたんだな。ここ1年描いていないから、今となっては同じように描けるかも分からない。
黙っていた俺に、美湖は心配そうに聞いてきた。
『絵・・・・・・・ある？』
「・・・・・・ない」
どんな顔をするかと美湖の顔を見上げると、見たこともないほどの悲しそうな顔をしている。
「ごめん、どうしても、描く気になれなくて。1年近く描いてないから、今ちゃんと描けるかも分かんないし」
『描いてよ。描いてたら、また前みたいに描けるって』
しばらく俺は考え込んだ。そりゃ、描いてたらまた調子だって戻

ってくるはずだ。
でも――何を描くんだ。前は何を描いていた。
『あの池行こう。いっつも、あの池描いてたし。今から、一緒に。明け方まではまだ3時間くらいあるから、大丈夫』
「明け方？」
と俺が聞き返すと、美湖が肩をすくめる。
『明け方の5時までには、帰んなきゃ消えちゃう』
消えちゃう――――つまり、永遠にこの世にあらわれることはないわけだ。
「行こう、じゃあ。ちょっと待ってて、着替えるから」
前のように一番上にあった服をひっつかんで、さっさと着替える。スケッチブックと鉛筆――これを出すのも1年ぶりなわけで、薄くホコリがつもっていた――をかばんに入れて、美湖とともに家を出た。もちろん、親を起こさないようにかなり注意して、だ。
外には誰もいなくて、静かな町を俺は自転車で、美湖は「飛んで」行く。
あの頃のように、公園を抜けて、木の並木を抜け、さらに奥の森へ入って――――
記憶の中と同じ、でもかなり久しぶりな、青緑に澄んだ綺麗なあの池があった。
『やっぱり、ここはいつ見ても綺麗』
俺より先に立って、振り返って美湖が言う。美湖の体が透けて、その向こうに水が見えた。
「どこで描く」
池の周りを歩きつつ、俺は聞く。
『光が好きなとこ。今は月が出てるから、いつも来てた昼間よりいいかもよ』
好きなとこ。好きなとこって、どこ。
分からなかったので、今立っていたところ――――露の上に腰を下ろした。

かばんからスケッチブックと鉛筆を出して、描き始める。やっぱり上手く出来ずに、それでも根気よく続けていくと、少しずつ・・・・・・本当に少しずつ、描いてる本人にしか分からないほどだが、調子が戻ってきた、気がした。
『描けてるよ。最初に描いたところ辺りは前と比べるとアレだけど、今のところは全然、前通りに上手いし』
「描いてる本人にしか分からない」と思ったが、美湖には分かったらしい。
そのままぽつぽつ言葉を交わしつつ1時間ほどが過ぎ、下書きが完成した。
「じゃあ色は明日・・・・・・」
と言った俺に、美湖はすがるような目で言う。
『今夜帰ったら、もう来年まで来れないから・・・・・・出来たら5時までに、完成しないかな』
腕時計をみると、3時くらいだ。あと2時間。いつも――――と言えないことが今となって悲しくなる――――よりかは雑になるかもしれないが、完成は可能だろう。
「多分・・・・・・出来るかな。いつもより適当でも文句言うなよ」
さっきの、「描いてる本人にしか分からない」ものが分かった美湖だ、どうせ「少し雑」も見抜くだろうから、予め言っておく。
美湖はうなずいて、じゃあ帰ろう、と笑った。
来る時と同じように、自転車と「飛ぶ」のとで、家に戻る。
使い古しのTシャツなど、いろいろと使って色を塗っていった。
少し雑になると思ったが、案外普通に出来た。
『なんだ、いつも通り上手いよ』
と美湖は笑って、その笑顔に影が差す。
『もう、帰んないと。また来年ね』
まるで夏休みの親戚同士だ。でも、あくまでも美湖は友達なわけで――――
美湖の顔が、何か言いたげになったがその表情がすぐに消え、困

ったような笑顔で『じゃあね』
と言う。瞬く間に美湖の足から薄くなり――――やがて、光のきらめきだけになって消えた。

第17章

そのあと、俺は再び孤独になった。
美湖が完全に見えなくなった直後に、あの気持ちを思い出して、なぜ言わなかったと自分を罵る。
うわぁ――――――美湖が死んだ時、あれほどに後悔したくせに、その過ちをもう一度繰り返すなど馬鹿もいいところである。
そうしてしばらく沈んだ後、美湖の台詞を思い出した。
――――――『また来年ね』
美湖はそう言ったのだ。ということは、美湖は再び俺の前に現れる。きっと、来年の今日に。
なら――――――
「また、来年言えばいいんだろ」
そうつぶやくと、なんとなく安心した。

次の日の学校は、久しぶりに真面目にノートを書いた。しかし、授業の内容がほとんど分からなかったというのは言うまでもない。高校の受験勉強はちゃんとしていたものの、入学してからほとんど授業を聞いていなかったからだ。
ノートの飛んでいた長い長い分は、仕方がない、瞬にでも見せてもらおう。
もう前向きになれたせいで、部活はどうしようとか、友達は瞬だけじゃないかなどという心配点が新たに浮かんできたのだが、その点もどうやら大丈夫らしかった。
授業が全部終わると、瞬が俺を引っ張って美術室に行く。部活に行くんだと言う事はもちろん分かったが、なぜ今更俺を連れていくのかが分からなかった。
「先輩、みんな、こいつが光です」
瞬の言葉に、絵に没頭していた部員の人が一斉に顔を上げて、こ

ちらを向いた。俺は俺で、「こいつが」の意味が分からずに怪訝な顔をしていた・・・・・・と思う。
「あぁ、色鉛筆のめっちゃ絵上手い人？」
1人が言うと、みんなが「あぁ、あの」と言う風にうなずいた。
「あのって、どの？」
と、挨拶も飛ばして聞いた俺に先輩・・・・・・だと思う、その人が笑って答える。
「瞬君から、話聞いてたから」
「話？」
またも聞き返す俺に、今度は恐らく同学年の人が言った。
「下描きからものすごく細かくて、色塗るときも色鉛筆で丁寧にやっていって、出来あがりがものすごく綺麗で上手くて、だったかな？」
決まり悪くなって、俺は顔を赤らめてうつむいた。そんな、大袈裟な。
「いや、そんなにそこまででも・・・・・・ないですから、本当」
瞬を密かに恨みつつ、俺は言う。
「で――――今日部室に来てくれたってことは、入部してくれるのかな」
いきなりの話に驚いて、思わず瞬を振り返るとニッと笑って言った。
「俺はそのつもりで、連れてきましたけど」
でも、今見る限りでもほかの人のが中学とは格違いに上手くて、「途中入部」は難しそうに見える。
「追いつけるの・・・・・・かなぁ」
とつぶやくと、「大丈夫！」と瞬が俺の背中を叩いた。
「俺より上手いから大丈夫っ」
何を根拠に言っているのかは分からないが、瞬の顔は自信に満ちている。
「瞬君が言うなら、いけると思うよ。美術部の中でもかなり上手い方に入ってると思うから」

さっきの先輩が言って、また別の人も口を開いた。
「とりあえず、簡単に描いてもらったらいいんじゃないの？」
確かに、とみんなが口ぐちに言い、花の花瓶を前に鉛筆を持たされた。
「本当に1年くらい、描いてないから・・・・・」
とつぶやきつつスケッチブックに向かう。美湖のことは言いふらすことでもない、というか非現実すぎて言えないので、これが1年振りの絵、ということにしておいた。
人に見られると描きにくいだろう、ということで俺が描いてる間は、みんな自分の絵に戻っておいてくれる。そんな気遣いはさすがだと思った。
しばらく経って、色塗りも含めて完成した。それを言うと、全員が俺の前に集まってきて口ぐちに激賞。俺の有無を問わず、入部が決定した。「有無を問わず」と言っても、聞かれたとすれば俺の答えはもちろん「Ｙｅｓ」だ。なんとか追いつけてるらしいことも分かったし、先輩も同級生も含め、俺を歓迎してくれていた。
これももちろん、瞬が前々から俺のことを話してくれていたおかげだ。こういうときは、本当にいい奴だと思う。
友達と言う面でも大丈夫だった。瞬とクラスは違ったものの、美術部の尚平が自分の友達たちに紹介してくれたので、もう既に「友達グループ」が出来た中でも、俺はやっと「新しい友達」を作ることが出来たのだ。

――――――――――――――――――――こうして俺はいろんな人のおかげで、中学の時のような、楽しい日々を取り戻すことが出来たのだ。

第18章

俺がただご飯を食べて寝て起きて、部屋にこもりがちな生活をやめたことを、両親も喜んでいる様子だった。リビングで話しているのが聞こえたのだ。

そして、この会話で俺がどれだけ塞いでいたか、そしてそこまで塞ぐほどに美湖の存在が大きくなっていたことを再確認した。

「来年に、言うんだから」とつぶやきながら、前のように描くようになった絵の続きを描きに2階へ上がる。

絵に手をつける前に、何気なく前に描いた絵をめくっていくと天使の絵が目に入り、俺は思わず微笑んだ。今見れば、本当に美湖そっくりな奴だ。今のところで、俺の中で一番のお気に入りで、一番大切な絵になっている。

そんな感じで、前よりも人物画が少し増えたこと以外は、前と何ら変わらない生活だ。

ただ、綺麗な景色などを見るたびに「美湖が見たら喜ぶかな」などと思いつつ絵に描くのは言うまでもない。しかし、学校行事の時などは絵の道具を持ってくるわけにもいかず、先生に隠してカメラ持参は常だ。「うわぁー、そのまま描きたい」と歯軋りしながらシャッターを押す俺に、「俺も描きたいから現像して頂戴」と尚平が呑気に声をかけてくる。

「えー、カメラを隠し通す労働力的にさ、タダではあげれないよ、多分」

と冗談交じりに言った俺に、「ケチな奴」と呆れた顔で言った。

「あ、本気にした？」

と笑うと、「そんな振りしてみただけ」と跳ね返された。

尚平の方が、いろんな意味で1枚上手だ。

瞬にも同じことを言われて、同じ様に言うと「冗談だろ」と返ってくる。

「うん、冗談。尚平は呆れた顔しといてさ、俺が冗談だって笑ったら本気にした振りしてみたとか言うから」
と言うと、瞬は笑って言った。
「多分、途中までは本気にしてたって。冗談って分かった瞬間に『振りしただけ』って言っただけだろ」
さっきの「尚平は1枚上手」というのは撤回する。
「中学の時はさ、俺が光に納得させられる側だったのに――――最近、逆じゃないか」
と、瞬が苦笑いして言った。微妙に悔しくなった気がしたが、自分でも事実だと思ったのでうなずく。
「あーあ、今もこれに納得させられた」
と口を尖らせると、「なんでだろうな」と瞬が言った。
「高校の事とか、瞬の方が知ってるからかな」
と言うと、「入学したの一緒なのに」と言う。
「・・・・・・いろいろと、迷惑かけまして」
と今更ながら――――と言ってもまだ言っていなかった――――「お礼」的なことを言うと、
「本当、そうだよな」
顔を歪めて言い返される。しかし、フッと表情を緩ませて瞬は続けた。
「でも、何があっても光が戻ってよかったよ」
こんな俺らを見て、美湖は何と言うだろう――――
その答えは、次の初夏にすんなり出てきた。

第19章

『・・・・・・光ってば』
うっすら目を開けると、少しばかりむくれた顔の少女が覗きこんでいた。
『去年来たんだから、すぐ気付いてもいいものを』
と、こっちが話す前に文句をつけてくる美湖に苦笑して、「ごめんって」と謝る言葉――――「言葉」なわけで特に謝罪の気持ちもなく――――を言うと、『まぁいいけどさ』と言う。
『絵は？出来てる？』
結局は挨拶も抜きに聞いてきた美湖に、そこは気にするところじゃないと自分に言い聞かせつつ答える。
「うん、結構増えてるよ。だって去年、美湖がかなり悲しそうな顔してたから」
『見せて』
俺がまだ言い終わらないうちから美湖の返事。そう来るとは分かっていたので、予め机に出しておいたスケッチブックに手を伸ばす。
『わぁ、これどこ？』
1枚1枚に美湖は歓声を上げて、そのたびに俺はそこでの思い出話を聞かせる形になっていた。自分が行っていない、というか行けなかった事をそんな楽しげに話していいものかと迷ったが、美湖が気にするな、むしろその方がいいというので、「楽しげに」とはいかずとも、普通に話すことにする。
「これ、校外学習の時のやつ。すごいだろ、中学は市内しか無理だったけど、高校は県内いけるんだから。直に見て描きたかったけど、時間も決まってるし班の奴らもいるのに絵の道具持っていくわけにもいかないしさ。だから隠してカメラ持って行って――――」
『それ、知ってるよ。修学旅行の時もそうだったじゃん。・・・・・・良かった、修学旅行はギリギリ行けて』

美湖にしれっとした顔で指摘されて、「あぁそうか」と思い出す。
「綺麗だったよな、あの海。この辺りじゃ、そんなもの見えないしさ」
俺の言葉に美湖もうなずいて、楽しげに笑った。
『水が透けて魚見えるって、よっぽど綺麗じゃないと無理だよね。青い海ってまさにアレ』
そのあとも、家族で行ったところや瞬と尚平と行ったところなど、いろいろな話をしていく。
もちろん、尚平の紹介を終わらせてからだ。
「『もう友達作るのも無理かも』と思っていたところに、自分の友達を紹介してくれた」と言うと、『いい人』と笑っていた。部活のことで瞬のことも話題に出すと、『さすが、幼なじみモドキ』と言う。表現が俺と同じだったことに少々驚きつつも、2人で笑っていた。
あの池の絵を見て、今年も行こうと言う事で、俺は着替えて、外に出て自転車にまたがる。まだ冷たい空気の中を「飛ぶ」のと漕ぐので進んでいくと、今回は特に懐かしくもないような景色が見えてきた。
『変わらないね、ここも』
とつぶやいた美湖は、池の畔(ほとり)に花が咲いてるのを気付き、『ちょっとだけ、変わったか』と言い直す。
「特に誰が植えたわけでもないと思うけどさ、すごいよな、勝手に栄養もらって勝手に育つんだから」
と俺が言うと、美湖が少しだけ怪訝な顔をして言った。
『なんか、迷惑がってるみたいな言い方』
「いや、別にそんなわけじゃなくて。――――そう、「1人でに」って事だよ。その、なんていうの――――――もう、「自然はすごい」って言いたかったのっ」
最終、やけくそにそう言うと、美湖が笑って『なんか、変わったね』と言う。

そこで、俺が瞬に納得させられる、という話を思い出して言った。
『やっぱり、そうなんだ。中2・3の時は本当に冷静だったもん』
気付かないうちに、そうなっていたらしい。自分の変化に自分で気付く人も少ないだろう。
俺の話をさんざんしたところで、次は美湖が「上の世界」の話をしてくれた。
美湖曰く、一般的に「天国」という感じのところはあるらしい。ただ、みんな輪っかを頭に載せて、翼を背中に生やしていると言うのは全然違って、死んだ時の格好らしい。
『同年代の子たちもいるし、それなりに楽しいもんだよ』
と美湖は笑う。俺も一緒に笑ったが、『光も来る？』と言われた時は本気で恐ろしくなって出来るだけやんわりと断った。
楽しい時間ほど、あっという間に過ぎるものだ。もう時間が来る。今日は家に戻ることもなく、この池で別れることになった。
美湖はまた『またね』と微笑んで、手を振る。俺も振り返して、あわてて叫ぶように付け加えた。
「来年までに、また絵いっぱい描いとくから」
その言葉を言い終わる頃には、美湖は完全に光のきらめきと化していて、届いたかは分からなかった。

第２０章

そのあと俺は、しばらく空を見上げてからベッドに戻った。
といっても、せいぜい後１時間少ししか寝ることは出来ない。まぁ、それでも寝ないよりはましなはずだ。
というわけで、１時間程寝てから、俺はいつもと同じような朝を迎えた。中学の時とは道が違うので、俺が瞬の家のベルを押して行く。何があっても、俺はベルを押す側らしい。
「おはよー」
と、瞬が言ってくる。
前のように後ろから駆けてくることもないので、前のように「光――――――――っ！」などと呼ばれることもなくなった。
「おはよ」
と俺も返して、駅の方へと歩き出す。高校生になって初めて手にした定期を使って電車に乗ると、同じ制服の人がちらほらいる、のは常のことだ。
例によって例のごとく、絵の話などをしながらガタガタと揺られていると、途中の駅で美術部の先輩が乗ってくる。これも、常のこと。
学校に着けば瞬と一緒に階段を上って、その途中で尚平が後ろから走ってきて、３人で肩を並べ、教室の前に来ると瞬と別れる。
教科書を机に突っ込んだら尚平たちと喋り、ベルが鳴ったら席に座って朝読書の本を広げた。
担任の先生が入ってきて、先生も自分の本を広げつつ、全員が読書をしているかチラチラと確認してくる。この担任の読書に関する厳しさは学年全員が理解しているので、本を読まないという墓穴を掘る馬鹿はいなかった。どれだけ読書嫌いな奴でも、この先生に頭を思いっきり叩かれ、怒鳴られ、睨まれるよりはマシだと、とりあえずは字を目で追っている。

今日は水曜日で、俺が一番好きな曜日だ。それも、今日は特にいい方である。水曜の１時間目は美術で、２時間目は美術と音楽が交互に入るようになっている。そして、今日はそれの美術の日、というわけだ。音楽もそれなりに好きなので、２時間目が音楽の日でも特に嫌とは思わない。

「これ、デザイン出来た？」

と、隣の机の尚平が聞いてきた。今は、紙粘土で何かを作ろう、というようなもので、俺が最も苦手とする分野だ。尚平は絵よりもこっちの方が得意らしいので喜んでいる。

「デザインは出来たけど・・・・・・絶対作れねぇよ、こんなの。ていうかさ、紙粘土はちょっとしかもらえなくて中に厚紙とか針金とか入れて――――――「自分なりに工夫」って本当に出来ないんだけど」

美術部の顧問でもある先生を上目づかいで密かに睨みつつ、俺はつぶやいた。

「工夫、いつもしてると思ってたけど・・・・・・ほら、雲のところ消しゴム使うとか、空とかはＴシャツでこすってぼやけさすとか」

尚平の言葉に、思わず俺は顔を見返した。

「あれって工夫？」

「え、違うの？」

逆に目を丸くされて、俺は戸惑ったが、１人で納得した。あんなの、自然と身に着いた技能だった。特に誰かに学んだわけでもなく、ただ雲は白だったら上手く出来なかったから、空は一色に塗ると綺麗にならなかったから。気付けば自然とするようになっていて、いつ見出したのかなど覚えていない。木の色を塗るときは消しカスを下に置けばくぼみの部分が上手く出せる、というものに至っては、たまたま机の消しカスを片付け忘れていて、うっかりその上で色鉛筆を使ったらいい感じに出来た、という「偶然」さだ。

「そうか、あれって工夫なのか」

１人つぶやいた俺に、尚平が笑って答える。

「うん。だからさ、日頃からやってんだから出来るって」
そうは言ってもなぁ、と俺は飽きてきて頬杖をついた。そうは言っても、絵と工作は違う。
ためいきをつきつつ教科書をめくっていると、湖の写真が載っていた。
「・・・・・・・ぁ」
後の流れは推して知るべしである。

２ヶ月ほど経った頃、全員の作品が完成した。遅れていた人は放課後残ったり、家で仕上げてきたりしたのも含めて、だ。
俺の作品は、石で囲った湖に木が立っていて、その周りに花などが咲いているような感じだ。
どこかというのは言う間でもない、あの池である。
結構平凡なデザインではあるが、俺にとってはいい出来だ。色塗りが絵の具、という点で少し色が雑になっているのも加えると、「美術部の人が作った」とは言い難いが。
瞬と尚平には、どうしてこんなものが出てきたか、というのは言っていない。それを言ってしまうと、「秘密基地」のことも言う事になるだろうし、あれだけ美湖のはしゃいだ姿を見るとうっかりバラすわけにもいかなかった。
瞬のは、というと、さすが絵の具の扱いが上手いこともあって色は綺麗だし、形もまぁまぁ整っているし、とりあえず俺のよりは上手い。
尚平のは・・・・・・もう、自分で「得意」と言えるだけあって、とてもとても口で言いあらわせるものではなかった。

「これも、工夫ってわけか・・・・・・」
家に帰ってから、俺は１人でＴシャツで空の部分をこすりながらつぶやいた。
自分なりの、工夫。今となっては、色鉛筆を使う人ならこんなこと

をやってる人くらい知っているが、これを見つけた幼い――――――――かどうかもよく分からないが――――――――頃は、人もやってるなど考えたこともなかった。自分で見出したわけだから、これは「自分なりの工夫」に値するのかもしれない。
　そんなことをぼんやり考えているうち、下から母さんの呼ぶ声が聞こえた。
　父さんも母さんも揃って夕食、というのは久しぶりで、なんだか新鮮だった。
「最近、絵は描いてるのか」
という父さんの問いに、俺はうなずく。
「本当に、前通りよね」
と、母さんがクスクス笑いながら付け足した。
「前通り・・・・・・なのかな、最近は人物画もちょっと増えてるけど」
俺の言葉に、父さんがかなり意外そうな顔をする。
「最近に見た時は、風景画ばっかだったのにな。――――――いや、でも1個、天使っぽい絵があった気がするけど」
　最近、というのは中2の時のだ。今が高2なので3年前だが、大人にすれば3年くらい「最近」になるらしかった。・・・・・・そんなことより。
「天使っぽいってなんだよ、っぽいって」
口を尖らせた俺に、父さんは笑って応じる。
「いや、最近とはいえども3年前の絵だから、記憶の中で曖昧になってるだけだって。今見たら普通に天使に見えるさ」
　とりあえず、「3年前」という自覚はあるらしかった。でも、父さんの頭の中で「っぽい」という曖昧なままでは困るので、強制的にもう一度見せてみることにする。見せたところで、「普通に天使に見える」ことが無かったらこの上ない笑い物になるが、「普通に天使に見える」ことを願いつつ、夕食のあとに自分の部屋に引っ張り上げることにした。それを言うと、母さんも「私も久々に見る」

と言いだして、最終的には3人で上がることになった。

「なんだ、上手いじゃない」

天使の絵を見て、第一声をあげたのは母さんだ。父さんも、無言でありながら目で「感想」らしきものは窺(うかが)えた。

良かった、と安堵の息をついて、「どう、天使っぽいの」と、どこか挑戦的な口調で聞いてみる。父さんは苦笑して、

「いや、普通に――――――ていうか普通以上に天使だよ」

と言った。「普通以上の天使」がどんな天使かは分からなかったのだが、俺の疑問を読んだかのように母さんが代弁する。それに、父さんは少し困惑したような顔で答えた。

「いや、だから・・・・・・天使自体が普通以上なんじゃなくて、その絵の天使が普通以上っていうか、いやその――――――とりあえず、思ってた以上に上手かったってだけだっ、以上！」

無理やり断ち切られたその話題に、俺と母さんは首をかしげるばかりだったが、とりあえず父さんに褒められた、ということだけは察することが出来た。「父さん＝滅多に褒めない」という方程式が自分の中で定着しているので、思わずにやけそうになって、咄嗟(とっさ)に何でもない顔を作る。

そのあとも、父さんは中2に見てから増えた絵を、母さんは中学に入った辺りの頃からのをそれぞれ見始めた。俺は、その間何をすればいいのかも分からなかったので、とりあえず描きかけだった絵の続きに没頭する。

母さんの方が、絵の関心が薄いらしくあっという間に見終わったようだった。・・・・・・いや、もしかしたらざっと見ただけで、全部見てない可能性もある。

「今描いてるの、何？」

見終わった後に、俺の手元を覗きこんで母さんが聞いてきた。

「んーっと・・・・・・今日の朝見た雲と虹。いい感じに綺麗だったから、写真撮ってきてそれを写してるところ」

と答えると、首を傾げる。何も言わなかったが多分、内心は「写真で撮ったんだからわざわざ絵に描くことないでしょ？」といったところだろう。

「違うよ、写真と絵では全然違うから」

何も言われていないのに一方的に口を開いていて、母さんがまじまじとこっちを見てくる。

「よく分かったね」

「分かったも何も・・・・・考えることって、大抵そんなとこなんじゃないかと思って」

ふーん？と母さんはまたも首を傾げた。俺が母さんの考えが分かったのは、今までに何回も同じことを聞かれたからだ。写真は写真、絵には絵のいいところがある。もちろん、絵を描いたからと言って写真を捨てることはない。いいところをそれぞれ楽しむ、というのが俺と瞬、尚平のやり方だ。

第21章

「すっげぇ、京都タワーある、実在するっ」
と歓声をあげる瞬に、「当然だろ」という突っ込みを入れつつも、俺も京都タワーを見上げた。太陽に反射して輝いている姿が眩しい。
「一旦集合、班のメンバーが全員いるか確認してー」
学年の先生が言って、みんな京都タワーを眺めながらとりあえず集合した。かろうじて班長は班の人数を数えているが、そのほかは上の空で京都駅付近の景色を眺めている。そして、この班の班長はといえば、真剣勝負のじゃんけん結果――――――俺に決まった。
「旅館に荷物置きに行ったら、夕食までは自分たちが決めたところ見物、時間余ったら後は自由行動で、時間になったら旅館に戻ってくること。道が分からなかったら地元の人に聞いて。あくまでも修学旅行生としての自覚を持って、恥をかかないように。ということで、荷物置き次第財布と地図を忘れずに持って、各自出発ってことで――――――以上！」
早口に先生が言って、全員が予め決められていたバスに乗り込む。バスの中でも、みんな興奮していろいろな事を早口にまくしたてる中、俺たち3人はカメラのバッテリー確認。今回はカメラ持参はOkということで、隠す必要もない。
後ろの席にいる同じ班の女子3人は、やはり周りと同じように喋りとおしていた。
今回の班は、クラスは関係なく男女3人ずつ、自由に6人で組むことになっている。男子ではもちろん瞬と尚平なのだが、果たして女子はどうなるものか。特に仲のいい奴らもいないので、同じ様な状況の奴らが現れるのを待とうということになったら、おずおずといっても程があるだろ、と思わず突っ込みを入れたくなるような声で向こうから誘ってきた。
――――――あの声は、本当に尋常じゃない。初対面の美湖よりも

ひどかった。
　この誘いを、ひたすら待つだけだった俺たちが断る理由もなく、6人で組むことになった。プランは全て女子に任せておく。俺たちは絵になるところが見えたら満足だし、とりあえず京都に来れたら満足、という状況だったので、全部を決めてくれた女子たちは、俺たちにとっては感謝すべき相手だった。
　こいつらとロビーで待ち合わせをして、小走りに部屋へと荷物を置きに行く。自由行動時用の肩下げ鞄に財布、地図、カメラを入れて――――一番最初に必要と分かり切っていた鞄をあろうことか着替えの下の方にいれていた瞬に文句を言いつつ――――ロビーへと駆けおりる。俺たちも、いざ来たらそれなりに興奮していたのでつい走ってしまっていたが、女子の準備というのは謎に遅い。というわけで、いそうだ意味もなくロビーで待たされることになった。ほかにもそんな班はたくさんあって、お互い苦笑する。
　ようやく女子3人――――伊勢谷（いせや）と、芦刈（あしかり）、白砂（しらすな）が階段から駆けてくるのが見えて、軽く合図する。
「ごっめんっ！こいつがいきなり髪くくりなおすから――――――」
「ちゃっかり人に罪押し付けないでよ。自分だってとかしてたくせに」
「・・・・・・そんなことよりもうちょっと真面目に謝るべきだと思うよ」
勢いに任せて喋る伊勢谷と芦刈をなだめるように白砂が言う。2人にそう言った後、困ったようにこっちを見た。
「ごめん、2人が髪直してたのもあったけど、私がうっかりこの鞄下の方に詰めてたものだから――――――」
その言葉を聞く途端に、尚平が吹きだす。
「瞬と一緒じゃねーか」
「今それぶり返すこともないだろーっ」
　そんな2人をよそに、俺も白砂に向き直った。

「いや、全然大丈夫だから、本当。尚平の言った通りにこいつも一緒だし」
今まで喋ったこともなかったからか、今まで硬かった白砂の表情がここで初めて緩んだ。その顔がどことなく美湖に似ていて――――――思わず、俺はここに美湖がいたらどうなったか考えてしまった。
「そんなことより、早く行こうー？」
白砂の肩から顔を出した伊勢谷の声で、美湖の事は頭の隅に寄せて――――――決して、振り払ってはいない――――――俺はうなずく。
「なつ達が言いあってるからじゃん」
と白砂が言うが、「だって心美（ここみ）が・・・・・・」と伊勢谷が口を尖らせた。
「なつ」というのが「伊勢谷　那月（なつき）」のあだ名ということに気付くまで、少々時間がかかる。「心美」が「芦刈　心美」と気付くことも。そして、白砂の下の名前が「香澄（かすみ）」というのも、後々分かったことだ。
　というわけで、ごちゃごちゃ言いながらも俺たちは出発した。
「えーっと、とりあえず近くからってことで嵐山回るか」
と、俺がつぶやきつつ、地図を睨む。ごちゃごちゃといろいろなことが書いてあって、日頃から地図と無縁な俺にとっては迷惑極まりない。
「もうちょっと分かりやすく書けっていうんだよなー」
と文句を言っていると、隣で白砂が笑った。
「どこ行く、私地図には強いんだ」
俺は少し迷ってから、最終的に瞬たちを頼ることにした。
「お前ら、最初どこいきたい？」
「清水寺ー」
「人力車ー」
瞬が言い、次に伊勢谷が言う。

「よし、じゃあ清水寺な。尚平たち、いい？あと人力車は高いから却下。６人って、３台頼まなきゃダメだし」
伊勢谷が頬を膨らませ、尚平と芦刈は賛成した。
たまに景色の写真を撮ったり、地元の人に６人でのを撮ってもらったりしながら清水寺まで歩くと、思いのほか時間がかかった。入場料の３００円を払って、中に入る。観光の季節だからか、外国人を含め人は多かった。
「ぁ、音羽の滝ってこれかな？」
芦刈が言う。
「手合わせたらいいことあんの？」
伊勢谷が首を傾げて、「やって損はないよね」と「黄金水」のところで手を合わせ始めた。
「俺、延命水ね」
尚平と瞬がそこに行って、俺も延命水で合掌する。
「私は・・・・・・黄金水でいいか」
白砂と芦刈もそう言って、最終的には男子が延命、女子が黄金となった。
あとは、寺の写真を撮ったりして、時間を潰し、混雑時は２時間で退場とのことだったので２時間後に、俺たちは清水寺から金閣寺に移動した。
「わぁ、教科書通りにキラキラじゃん」
尚平が声を上げる。
「やるな、足利義満」
俺もつぶやいた。でも、価値的には銀閣寺の方が上らしい。先生の話によれば、金閣寺は足利義満が立ててから一度燃えて建て直したらしいが、銀閣寺は建設当時からそのまま――――だとかなんとか。
ここも、写真に撮っておくことにした。もうすぐやってくるその日まで、きっちり絵を完成させておくのだ。
次にお土産屋を回りつつ、抹茶アイスを買い、渡月橋を渡って・・・・・・などとやっていると時間はあっという間に来た。

旅館に戻り、すぐに夕食の時間になる。大広間で班ごとに固まり、見たこともないような豪勢な食事に息を呑んだ。海老の殻を剥くのに少々手間取って、瞬に馬鹿にされ、それに対して豆腐相手に焦った顔をするところを馬鹿にしてやった。
次に風呂に入って、浴衣に着替える。
「俺さぁ、浴衣とか人生初なんだけど」
と瞬と尚平に言うと、「俺も」と2人とも意見が一致した。
「家族とどっか行った時も、いつもホテルだもんな。あの料理とか、本当ビックリしたし」
尚平が言う。
「・・・・・・でも、あんなのいくら取られるんだろ」
ボソッと瞬がつぶやいた。
「そんな、金のことなんか気にするなよ」
俺の指摘にうなずくが、瞬は「海老とかさぁ」ともう一度つぶやいていた。
風呂のあとは、男子部屋に集まっての「反省タイム」がある。俺たち3人の部屋に、女子3人が集まってきて、反省と言いつつの雑談が始まった・・・・・・・気がしていた。
「私さぁ・・・・・・財布落としたみたいで」
白砂の言葉に、伊勢谷と芦刈はため息、俺たちは声を上げる。どうやら、女子の2人は予め聞かされていたらしい。
「財布って・・・・・・・え、まじで財布？」
俺の言葉に、白砂がうなずく。もう泣き顔寸前だ。
「探しに、行ってくれないかなとか言ってみたりして」
伊勢谷が困ったようにこちらを見てきた。
「俺は、別にいいけど、先生の許可とかもらえんのかな」
瞬が言う。
「・・・・・・無理だろ。じゃあ、もう夜中くらいしか」
尚平も言うが、俺は首を傾げた。
「夜中でも、徹夜しようとか言う奴はいっぱいいるだろうし、先生

も寝てるかどうか・・・・・・」
しばらく全員が考え込んだが、俺は頭を上げる。
「まぁ、いいか。5時くらいまでに帰ってこれば大丈夫だよな、多分。じゃあ夜の1時に、着替えて・・・・・・どこにする」
その言葉に、女子3人の表情が明るくなった。
「じゃあ、私たちここに来るよ。いいよね、別に？」
芦刈が言って、あとの2人がうなずく。白砂の申し訳なさそうな顔は言うまでもない。
「ごめんね、本当に」
俺たちは首を振った。
「気付かなかった俺らも悪いし。全然気にすんなよ」
俺が言い、瞬と尚平もうなずく。

そうして、1時がやってきた。

第２２章

そろりと襖(ふすま)が開いた。
「着替えてる？フロントは明かりついててさ、ソファの影通ったりして大変だったんだから」
伊勢谷が言う。
「マジかよ。玄関出るとき、フロントんとこ通るよな」
尚平が苦々しい顔をしてつぶやいた。瞬は能天気に欠伸をしている。
「でも、ここで行かないわけにいかないし。さっさと出ようぜ」
俺の言葉に一行はうなずいて、足音と周りの音に全神経をとがらせながら廊下を歩き、ロビーへの階段を下りた。しかし、あろうことかフロントで、着物を着た若い人に見つかってしまった。
「えっと・・・・・修学旅行の、高校の方ですよね？こんな時間にどうしたんですか」
声を上げようとする女の人を必死で止めて、俺たちは頭を下げる。
「お願いします、今日の自由時間に財布落としたみたいで。先生には言わないでほしいんですけど」
俺の言葉に、女の人はあくまでもお客様だから安全が・・・・・・などとつぶやきはじめた。
本当、頼むから――――――思わず天まで見上げそうになって、あわてて顎を引く。
「本当に、お願いします。元は私のせいなので・・・・・」
白砂の言葉を瞬と尚平が制して、頭を下げた。女の人――――――旅館の人なら「仲居さん」か――――――は一旦フロントに引っ込んで、女将さんと相談してきたようだった。やがて女将さんと見える人も出てきて、もう一度頭を下げる。しばらく迷うそぶりを見せながらも、２人は懐中電灯３つ、渡してくれた。
「先生には言いませんから・・・・・・でも、何かあっても旅館側としては責任は負えませんよ」

その言葉に思わず声をあげそうになって、
「ありがとうございますっ」
と頭をまた下げる。これで何回目か、数える気にもなれない。
２人ずつに分かれたほうが効率もあがるだろうということで、それでも女子だけになったりすると危ないので、男女に分かれて「グッパ」の「グー」「チョキ」「パー」と、３つに分かれるバージョンをする。俺がチョキで、白砂と一緒になった。
「じゃあ、みんな時計持ってるよな。５時にロビーで」
俺の言葉に、瞬が「気をつけろよ」と言う。
「お前らこそな」
と尚平が笑い、「なんか楽しくなってきた」と呑気な事を言い始めた。
みんな手を振って、３つに分かれて進み始めた――――――

「本当にごめんね、知らない土地に夜中で歩くなんて、物騒すぎるよね」
道中、さっきも聞いた台詞を言われて、「いいって言ってんじゃん」と軽く流す。
しばらく歩いた気がするが、財布らしき影は見つからなかった。懐中電灯で足元を照らしつつ、今日回ったルートを見ていく。寺などはさすがにしまっていたので、それは明日にもある少しばかりの自由行動の時間に探していくしかない。
「あっ・・・・・・」
桂川の、渡月橋付近を見ていた時だ。川に光（ひかり）を当てていた白砂が声をあげた。
「何、あった」
と聞くと、うなずく。あわてて取りに行こうとする白砂を制して、財布があった場所を照らしておくように言う。草を掴んで、少し身を乗り出せば届く距離だったのでそうして、手を伸ばす。
――――――とその時、ものすごく強い風が吹いた。雲行きが怪し

くなってくる。なんで、昼はあんなにいい天気だったのに――――――そこで、俺は京都に来る前に見た週間天気予報を思い出した。

『火曜日は、昼は晴天ですが夜から雨が――――――』

クソ、なぜ思い出さなかった。なぜ、実際に起こる前に思い出さなかったんだ。自分を責めている間に、白砂が俺の腕を引っ張る。

「もう、いいよ。足立君このままじゃ落ちそうだし、川の流れもきつくなりそうだし」

そう言うが、せっかく目の前にあるものをあきらめたくはなかった。財布は、上手く何かに引っ掛かっているのか今にも流れそうだが、なんとか持ちこたえている。白砂の手をほどいて、もう一度草を掴んだ。雨は、嵐並みに強くなっている。いつしか川の流れもものすごく速い。

水の中に突っ込んだ手が流れに呑まれて、乗り出していた身も流されそうになった。それに反抗するように草を思いっきり掴み直すと。

プチ

かすかに音がして、体が水に落ちる。白砂が手を伸ばしたのが分かったが、その手は虚しく空(くう)をかくだけだった。

うわ、死ぬのかな。こんな深夜に、携帯も置いてきて、助けも来なくて、死ぬのか。

不思議と、そこまで悲しくもなかった。ただ、美湖と同じ側に行けるのかな、それだけ。

その時、誰かが腕を掴んだ気がした。白砂か？いや違う。掴まれている気はするが、宙に浮いている気もする。チラリと上を窺うと――――――美湖のような顔が見えた、気がした。

目が覚めると美湖が、いや白砂が、心配げな顔でこちらを見てい

た。
横を窺うと、さっき見た財布が放り出してある。腰をあげようとして顔をしかめるが、木にもたれかかるようにして無理やり起き上った。
「あ、財布・・・・・・取れた？」
と俺が白砂に聞くと、泣きそうな顔で笑われた。
「足立君が、掴んでたんだって。ごめんね、本当にこんな死にかけるようなことまで――――」
また謝る白砂に俺も笑いかけて言う。
「全然。よかったじゃん、財布見つかって。なんで川に落ちたのかは知らないけどさ。・・・・・・あ、でも中身、あった？」
白砂は首を横に振った。
「同情かな、１０００円札１枚は入ってたけど。でも、お金より」
財布をごそごそして、写真を取り出す。
「これの方が、大事だから。私が生まれてすぐにどっか行っちゃった、お母さんの１枚だけの写真なんだ。お父さんとお兄ちゃんと私、捨ててったって事は分かってるんだけど・・・・・・やっぱ、大事で。・・・・・・変、なのかな？」
首を傾げる白砂に、俺は首を横に振って微笑みかける。
しばらく濁流の川を眺めながら、黙って過ごした。５時まではあと１時間くらいある。
ふいに、白砂が口を開いた。
「好きだって言ったらさ、足立君怒る？」
思わず顔を見返すと、困った顔で言われた。
「こんなことに巻き込んどきながら、ごめんね。でも、修学旅行のちょっと前からずっとなんだよね。班決めるときに、女子探してたでしょ？私たちもそうで。で、なつと心美が『どうせなら』って言ってくれたから――――」
そこまで言って、笑う。
「こんなことになるって分かってたら、誘ったりしなかったんだけ

どな」
俺はしばらく考え込んだ。答えは言う間でもなく「断る」なのだが、即答は何だか悪い気がするので、考え込むふり。
「ごめん、やっぱ無理だ。いや、違うから、財布の事はまじで関係ないからな、ただ――――――」
一息置いて、白砂の目を捉える。
「他に好きな奴、いるもんで」
一瞬、白砂の目に悲しみの色が浮かぶが、すぐにそれを笑顔に変えて白砂は言った。
「そっか、ごめんね余計なこと言って。こんな夜にありがとう。・・・・・伝えるだけでも出来て、良かった」
そこで、また一息つく。
「1回だけでいいんだけどさ、『香澄』って呼んでって言ったら困る？」
さっきから話し方が本当に美湖そっくりで、俺は困惑しそうになった。
「そろそろ戻るか。今から行ったら、5時ちょっと前に着くだろ。・・・・・香澄」
うわ、美湖以外の女子下の名前で呼んだのはじめてかも。自分の速まる鼓動を聞きつつ、言う。
「妙なわがまま聞いてくれてありがと」
と白砂は微笑んで、歩き出した。4時半の空は、徐々に明るくなっていくところだった。

第２２章（後書き）

ありえないにも程がある展開です、ごめんなさい（笑

第２３章

『よいしょーっと』
修学旅行も無事に終わり、地元に帰ってきて落ち着いた頃、美湖がやってきた。来るとはもう分かっていたので、そしてあの池に行こうと言うのも分かっていたので予め着替えて、ベッドに上に腰掛けている。いつもどうやって来るのか疑問だったが、どうやら「飛んできて」、窓から着地するらしかった。
『ぇ、うわぁ、光起きてる』
こっちを見て、一度目をこすりもう一度見てくる。
「失礼だな、ニ度見しやがって」
俺のつっかかる口調に、笑いながら頭を掻きながら言った。
『実はさぁ、これ言うとダメだなと思って黙ってたんだけどね、毎年光の寝顔と起きた時の顔みるのが密かに楽しみで――――――』
その言葉を制するように俺は思わず立ち上がった。
「ちょっと待て、俺はせっかく毎年楽しみにしてたのにさ、お前そんな事楽しみにきてたわけ？」
『違うよ、それは４番目くらいだよ？そんな本気に怒らなくても』
あわてて弁解を始める美湖を睨んで、冗談だと笑う。
『修学旅行、の季節だっけ？行ってきたの？』
美湖の質問にうなずいて、俺はあの時を思い出した。
「そうだ、修学旅行の時さぁ、お前夜中に京都来た？」
川から引っ張り上げてくれた、あの時だ。下から見上げた顔は、紛れもなく美湖だった。
しかし、美湖は首を傾げる。
『特別じゃないと、降りてこれないから』
でも、下から見たあの顔は――――紛れもなく、美湖だった。絶対に見間違えることのない、でも初めて見る、宙を睨むような目の、

美湖の顔だったのだ。
『・・・・・・まぁ、あの時は光が死にかけてたから特別だったんだけどね』
「じゃあ、あの時のはやっぱり――――――――」
俺の言葉に、これも珍しい表情だが、ニッと笑って言う。
『桂川に落ちた時でしょ？でも、あのあとの香澄ちゃんだっけ、その子の告白には木の影で嫉妬してたんだからね』
「いや、でも俺断っただろ！？」
あわてて言う俺に、美湖はどこかむくれたような顔で続けた。
『好きな人って誰よ』
「誰か、考えてみろよ」
そう跳ね返して、「絵、あるから」と話題を持っていく。
「これ金閣寺。リアルに光ってて、びっくりした」
美湖は物を掴むことが出来ないので、俺がめくってやりながら話を聞かせる、前と同じ形で時間は過ぎた。
なぜ物が掴めないのに俺を引っ張ったのか聞くと、少し笑って『ものっすごく疲れたんだから』と言う。
「清水寺はゴメン、まだ仕上がってなくて。描きかけはこれ」
机の上の画用紙を見せると、嬉しそうに笑った。
『楽しかった？』
「うん、もちろん。瞬がさ、京都タワーが実在するんだとか言ってて。馬鹿だよな、アイツ。あと、舞妓さんもいたし楽しかった」
そこまで言って、付け加える。
「美湖も行けたら、よかったんだけどな」
美湖の表情が寂しいような顔を浮かべたが、それは一瞬で消えて明るく笑った。
『何を今さら。光に思い出話聞けるだけ、楽しいよ』
絵をさんざん見た後、案の定美湖が池に行こうと俺の手を取る。・・・・・・といっても、周りと少し違う空気が手の周りで感じられただけだったのだが。

俺は外に出て、自転車にまたがる。
ひんやりとした空気の中を進んでいき、あの池へと向かった。
『ここも、変わらないね』
と美湖が伸びのような仕草をして言う。――――――とそこで、池の畔に咲く花を見て微笑んだ。
『あ、ちょっとだけ変わってる』
その花の隣にそっと腰掛けて、池の水に触れ、どこか寂しそうな顔をする。
――――――今日の美湖がなんだか違うと感じるのは、俺だけか。
『絵、描いて。持ってきてるんでしょ？』
美湖の言葉で我に返り、うなずく。今日は池の周りではなく、少し離れたところから描くことにした。
なんとなく、美湖の姿も入れて置きたかった。
ずっと黙ったままでいると、美湖も座ったまま黙っていた。
『実はさ』
ふいに美湖が口を開いたとき、俺は何か重大な話だと察して、筆を止める。
『今日で、降りてこれんの最後なんだよね』
「・・・・・・」
再び、沈黙。
「嘘だろ？」
と、沈黙を破ったのは俺だった。
『本当。それと、一昨年に「光の絵を見に降りてきた」っていうのも、半分は嘘』
唖然として何も言えない俺に、美湖は寂しそうに微笑みながら、でも追い打ちをかけるように続ける。
『やり残したことやったらもう降りてこれないんだけど、それも3回チャンス、みたいな。本当に、やり遂げた瞬間に消えるから。・・・・・後でね？』

言うだけ言って、さっきまでの顔はなかったかのように笑う。
「そこまで言って後でねってなんだよ、お前」
責めるように言ってみると、珍しく声を立てて笑い、『早く続き描いて』と促してきた。俺は半分むくれつつも、絵の続きを描いていく。
『ここに来てからさ、いろいろと楽しかったよ、本当』
ふいに美湖が言った。
「俺も、美湖と会ってからどれだけ1年早かったか分かんないよ」
手は止めずに、俺も返す。
『前いたところはものっすごい都会だったんだけどね、どこ行ってもいつも早足でさ。常に時間に追われて、自分の好きなことやってる暇とかあんのかな、みたいな。その勢いに呑まれて、私もそうだったんだけどね。でも、ここに来てからは――――――光と会ってからは、もうちょっとのんびりしてもいいんだって思った。光の絵描いてるところ見るの好きだったの、それもあって。自分の時間大事にして、好きなように過ごしてっていうのがうらやましくて、それに仲間入り出来たのも嬉しくて。――――――前いたところのクラスの人、気強い人多かったからさ、私別の意味で浮いてたし。ここの中学で、やっと馴染めたっていうことも嬉しかった。あんな川のところで風景画描けるほど自然が綺麗なのはビックリしたけどね』
俺が何も言えないままに、美湖は続けた。
『だから。・・・・・だから、トラック来た時は本当にビックリしたよ。ぁ、死ぬんだ、みたいな。せっかく自分の時間手に入れたと思ったのに、せっかく好きなこと見つけたと思ったのに、結構あっけないなー、って。今まで体験したことないほど悲しかった、本当。救急車のサイレンが聞こえて、現実突きつけられて、病院の天井殺風景で、それ見る間もなく勝手に目閉じちゃって。気失ってたのかな、あの時。病院でお母さんと光の声聞こえた気がするけど、気のせいだったっけ』

気のせいじゃない、本当に行った。スピード違反かってほど車飛ばして、行ったんだから。
　そう言おうと思ったが、残念なことに声が出なかった。
「・・・・・・お前のせいで、制服にかなり皺よったんだからな」
かろうじてそう言うと、『ごめーん』と笑いながら言う。
・・・・・・そういえば、さっき美湖が言った「好きなこと」ってなんだ。聞いてみると、恥ずかしそうに笑って言った。
『絵。同じ人間だしさ、光に出来るなら可能性くらいはあるかな、みたいな。練習はしてたんだけどな――――どうも、上手く描けなかった。まだ描ける間にアドバイスっぽいものもらっとけばよかった』
「多分、上手いと思うよ、美湖なら。だって――――うん、同じ人間だし」
　そう言って、なぜか泣きそうになり、やみくもに筆を動かす。絵が完成して、重い腕を上げながらそれを美湖に見せた。こうするのも、今回で最後というわけだ。
『相変わらず、綺麗な絵』
美湖がつぶやいて、しばらく絵を見た後立ち上がった。
『そろそろ、戻る？』
俺もうなずき、立ち上がる。絵の道具を片付け、木にもたれるように――――といっても美湖に木の感触はないと思うが――――待っていた美湖の元へ走り寄った。
『・・・・・・ここも、最後なんだね』
　ささやくように美湖が言い、俺もうなずいた。俺は来ることは出来るが、美湖と来るのは最後だ。
「忘れんなよ、ここ――――――秘密基地、なんだから」
俺の言葉に、美湖がクスっと笑って楽しげにうなずく。
　そうしてしばらく2人で小さな湖ともとれるような、月に照らされ青緑に美しいその「美湖」を眺めた後に、俺は自転車にまたがった。

この道を美湖と通るのも、最後だ。美湖は何も言わなかったが、俺は最後の約1時間をどうするか考えていた。何を言うか、とりあえず最後なら病院で浮かんだあの気持ちを伝えるべきだと思う。
そのあとは、そのあとは――――――流れに、任せよう。
家に着いた。俺はまた注意深く自分の部屋へと戻り、ベッドに腰掛ける。何気なしに部屋を見回してみると、壁に貼られて斜めになっていた天使の絵が目に入り、俺は頭で考える前に口を開いた。
「美湖、お前全然、自意識過剰じゃないから」
いきなりの事に案の定、美湖は怪訝な顔をする。
『何？自意識過剰？』
「覚えてないかな、美湖が初めて家に来て――――――ほら、俺も美湖の家で晩ご飯食べた日だよ。その日に、美湖が俺の小5くらいからの絵見てた時にその天使の絵みてな、「どことなく私っぽいと思った」って言ったんだよ。そのあとに、「自意識過剰だね、ごめん」とも」
そう言うと、美湖が思い出した顔をした。
『あぁ、気のせいだったやつか。あれでしょ、窓で手振った時に描いた』
俺はうなずいて、続ける。
「全然、自意識過剰なんかじゃない。手振ったあとになぜかあんな絵が頭に出てきて、でも描いてる途中は何も思ってなかったんだけど、出来あがった時に俺も美湖っぽいと思った。急いで金髪とかにしてみても、やっぱり変わんなかったよ、それは。目が違っても、巻き毛で金髪でも、美湖にしか見えなくなっちゃって。・・・・・多分俺、そんときから美湖のこと」
『好き』
俺が勢いに乗って言ってしまおうと思った時、そしてまさに言いかけた時、美湖が口を開いた。
『って、言いに来た』
「え――――――――――――」

俺がろくな言葉も返せないうちに、美湖が浮いている状態から腰をかがめて、自分の唇と俺の唇をくっつける。
『第一目的は、これだったんだけどね』
クスっと笑って、美湖が言う。目が水にぬれて、光っていた。早くも足から星のようなきらめきと化している。
「俺も、俺だって――――――」
あわてて言おうとするが、上手く出てこない。
「あ、ありがと」
自分でも情けなくなったが、まずはそれが出てきた。何が、というと今まで全部だ。
『私の方こそありがとう』
既に肩のあたりまで消えかけている。
「俺も、俺も美湖のこと、ずっと――――――」
美湖の、最後の微笑みが消えそうになった。
「好きだった」
その言葉を言い終わる頃には、俺の前には星屑（ほしくず）のように光る、金色の粉だけだった。
最後の一言が届いたかは分からなかったが、月と雲の間あたりにニコッと笑ったような表情が見えた限り、多分――――――届いたと思う。届いたと、信じたかった。

エピローグ

ある時、俺は美術室でかなり苦戦していた。
　教室の前の方には音楽の先生が座っている。この先生をモデルに描け、という課題だ。格好、髪型や服はそれ通りだが、表情は自由していいということなので、俺は美湖といえば一番に出てくる顔、あの微笑みを描くことにした。それなのに、それなのに――――――――

瞬が突然話しかけてきたせいで、色鉛筆がずれ、妙に悲しげな顔になってしまったところだ。
「口とかはさ、ちょっとした陰影で表情変わるよ」
　先生のアドバイスにうなずくが、それもどうもうまくいかずに苦闘している。
「どうしたんだよ？光、なんか調子悪いの？」
尚平が言うが、自分でもよく分からなくて首を傾げる。
「まぁ、誰が原因かは言う必要もないと思うんだけどさ」
苦笑して尚平が続ける。
「えっ、誰なの？」
わざとか本気か知らないがそう割って入ってきた瞬を睨みつける。
「誰だと思う？筆止めてでも自分で考えてみろ」
と俺が言うと、瞬が「誰だろなぁ？」とわざとらしく首を傾げた。・・・・・・さっきのもわざとだったか。
「え？誰かがいきなり声かけてきたから、鉛筆ずれたんだと思ったけど・・・・・・俺の気のせいかな」
俺の皮肉を瞬は聞き流そうとして、それでも返事を返してくる。
「うん、気のせいだって。多分気のせい、本当」
たじたじなって言うところが面白かったが、こちらの言葉がなくなったのでもう突き落してしまう事にした。
「気のせいじゃないと思うよ、俺は。なぁ尚平？」

「うん、俺が見たところでもその誰かが光にいきなり声かけるから」
「その誰かって誰だと思う？」
尚平と手を結んで瞬を見ると、「お、俺です」となんとも弱々しい声が返ってくる。
「ほら、さっきから認めときゃよかったものを・・・・・・ってそうじゃなくて、まじでどうしようこれ」
首を傾げてまた考える。陰影って、嫌いではないが苦手だ。
とそのとき、腕が動いた。特に意識したわけでもなく、鉛筆を握ったままだった手が画用紙の上を走ったのだ。
「あ、出来たじゃん」
瞬が覗きこんできて言う。
「うん、なんか・・・・・・」
勝手に動いた、と言おうとしてやめた。何気なしに部屋を見回すと、窓の外に広がる空の雲のきれまから、美湖の横顔と色鉛筆を握る姿が見える。ということは、さっきのは美湖の仕業か。
そんなことよりも。

――――――――美湖、お前だって絵、上手いじゃないか

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0998p/

エンジェル・ペイント

2011年1月20日10時24分発行